

はじめに

児童生徒のインターネット接続機器の所持率は年々高まる傾向にあり、これに伴い児童生徒のSNSなどのコミュニケーション（LINE等）の利用も広がっている。そこでは、SNSの利用を起因とした友人関係のトラブルが「ネットいじめ」にまで発展する事態も起きており、学校はその対応に苦慮しているのが現状である。しかし、一方では、禁止するだけの指導ではなく、相手と良好な関係を築くSNSの利用を考えさせる指導や家庭内のルール作りに取り組む学校もある。これからインターネット接続機器がますます普及していく社会において、学校は発達段階に応じた情報モラル教育の充実とともに、豊かな人間関係づくりに取り組み、情報化社会をたくましく生きる児童生徒の育成に取り組んでいく必要がある。

本県の公立学校を対象にした「平成28年度インターネット利用等に関する調査」によると、平日にインターネットを2時間以上利用している児童生徒の割合は、小学生で12.1%、中学生で29.5%、高校生で42.0%であった。「最も長い時間利用しているインターネット利用の内容」を見ると、小学生は1位「ゲーム」、2位「音楽・画像・動画の閲覧」、3位「学習活動」で、中学生は1位「音楽・画像・動画の閲覧」、2位「SNSなどのコミュニケーション（LINE等）」、3位「ゲーム」、高校生は1位「SNSなどのコミュニケーション（LINE等）」、2位「音楽・画像・動画の閲覧」、3位「ゲーム」であった。また、「インターネットを利用して感じること」として、「睡眠不足になった」と回答した小学生は2.6%、中学生は12.8%、高校生は19.6%で、「勉強に集中できないことがある」と回答した小学生は2.9%、中学生は15.5%、高校生は25.3%であった。インターネットの長時間の利用が、生活習慣の乱れや心身の不調などのいわゆる「ネット依存」の原因となり、さらに、児童生徒の多くが利用しているLINEやTwitterなどのSNSが「LINE外し」や「ネットいじめ」など、様々なトラブルの原因となっていると考えられる。

「鹿児島県教育振興計画」には、「変化の激しいこれからの社会を生き抜いていく上で、子供たちの規範意識を養い、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性やたくましく生きるための健康や体力を育む教育を推進します。」とある。そして、具体的な施策の一つとして、「生徒指導の充実」を挙げ、その中で「インターネット等に関する問題行動の未然防止、早期発見、早期対応に努めるとともに、情報モラルに関する教育を推進します。」とある。

したがって、学校は、いわゆる「ネット依存」やネットトラブルを早期に発見し、解消するために、全ての教育活動の機会を捉えて、豊かな人間関係づくりを進め、規範意識や他人を思いやる心等を育む指導・支援を積極的に進めていく必要がある。

本研究では、まず県内の児童生徒と教師を対象にした実態調査を行い、「豊かな人間関係づくり」における課題を明らかにし、SNS利用の影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」のための視点と組織的・計画的な取組を提示した。次に、児童生徒理解の深化を目指すために、従前の「学校楽しいーと」に加え、新たにSNS利用実態を把握する「SNSチェックシート」を開発した。最後に、研究協力校での実践を検証し、研究の成果と課題をまとめた。

本研究の成果が、学校で活用されることで、「ネット依存」やネットトラブルの未然防止と豊かな人間関係づくりが進み、一人一人の児童生徒が安心して充実した学校生活を送ることができるようになることを期待したい。

【研究主題】

児童生徒の豊かな人間関係づくりに関する研究
－SNSの利用による友人関係への影響に着目して－

目 次

はじめに	61
第1章 インターネット社会の進展と学校が抱える課題	
1 デジタルネイティブ世代の児童生徒の現状と課題	62
2 SNS 利用における「豊かな人間関係づくり」の重要性	63
3 本研究のねらいと期待される成果	63
第2章 教師や児童生徒の SNS に関する実態調査の結果と考察	
1 教師が捉えている児童生徒の姿と人間関係づくりの取組状況	64
(1) 調査の目的	64
(2) 教師対象の実態調査の対象・調査内容・調査時期・調査方法等	64
(3) 教師対象の実態調査の結果	64
2 児童生徒の SNS 利用実態と学校適応感・友人関係との関連性の実態	68
(1) 調査の目的	68
(2) 児童生徒対象の実態調査の方法等	68
(3) 児童生徒対象の実態調査の結果	68
(4) SNS を利用する児童生徒と利用しない児童生徒の比較分析	70
(5) SNS を利用する児童生徒の傾向と特徴の分析	73
3 実態調査のまとめと考察	80
(1) 教師対象の実態調査について	80
(2) 児童生徒対象の実態調査について	80
第3章 「豊かな人間関係」の育成に向けた組織的・計画的な指導・支援の在り方	
1 SNS の影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の三つの視点	81
2 サイクルで進める「豊かな人間関係づくり」	82
(1) 学級活動と個別のサイクルモデル	84
(2) サイクルモデルの点検と見直し	84
3 SNS の影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」のための児童生徒理解	85
(1) 児童生徒の実態を捉えるための SNS 質問紙「SNS チェックシート」	85
(2) 「SNS チェックシート」と「学校楽しいーと」による児童生徒理解	89
(3) 「SNS チェックシート」を利用したアプローチ	91
第4章 SNS の影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の指導・支援の実際	
1 SNS の影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の年間計画について	92
(1) 校種別年間計画の概要	92
(2) 年間計画を作成する上での重要なポイント	92
2 「豊かな人間関係づくり」の年間計画例（学級プラン・個別プラン）	93
(1) 小学校における SNS の影響を踏まえた年間計画例	93
(2) 中学校における SNS の影響を踏まえた年間計画例	96
(3) 高等学校における SNS の影響を踏まえた年間計画例	99
3 授業の実践例(中学校)	102
第5章 研究の成果と今後の課題	
1 研究の成果	105
2 今後の課題	105
おわりに	105
引用・参考文献	105

【研究主題】 児童生徒の豊かな人間関係づくりに関する研究
 ーSNSの利用による友人関係への影響に着目してー

1 デジタルネイティブ世代の児童生徒の現状と課題

現在の児童生徒は、生まれたときからインターネットが整備されており、知りたい情報をすぐに検索・収集したり、また、遠距離でも様々なやり取りができた社会であったことから、デジタルネイティブ世代と言われる。

本県の「平成28年度 インターネット利用等に関する調査」によると、自分専用の携帯電話の所持率（図1-2）は、中学校以外は減少しているものの、インターネット接続機器の所持率（図1-1）は全体的に年々高まる傾向にある。各学校においては、長時間の利用による生活習慣の乱れや心身の不調などの健康に関する問題、誹謗中傷などのモラル面に関する問題が山積しており、生活指導や情報モラル教育を在り方が大きな課題となっている。また、近年のスマートフォンの普及に伴い、LINEやカカオトークなどの無料通話アプリケーションソフト等のSNSを利用する児童生徒が増加している。特に高校生においては、インターネットの利用でSNSの利用が最も長い時間になっている生徒が4割を超えている状況にあり、日常的にSNSを利用している傾向が高まっていることが読み取れる（図1-3）。

児童生徒の多くが利用するSNSは、数文字から数十文字程度の短い文章を書き込んでリアルタイムにメッセージのやり取りをするテキストチャットである。先行研究では、テキストチャットによるSNSは、顔が見えない相手とリアルタイムに短いメッセージのやり取りをするために、スピーディーなコミュニケーションが求められるため、真意が伝わりにくく、誤解が生じやすいことや感情的になりやすいといった特性が指摘されている。そのため、児童生徒の人間関係づくりの指導・支援において様々な課題が生じていることが考えられる。

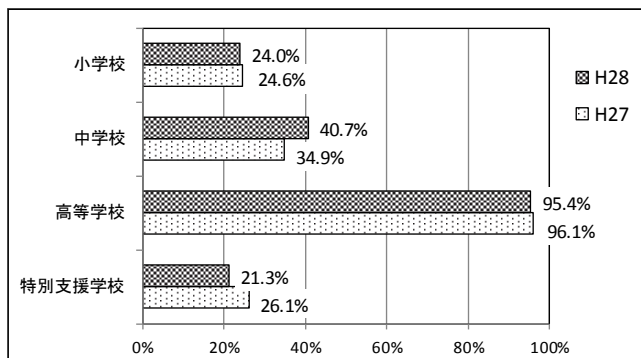


図1-1 自分専用の携帯電話の所持率

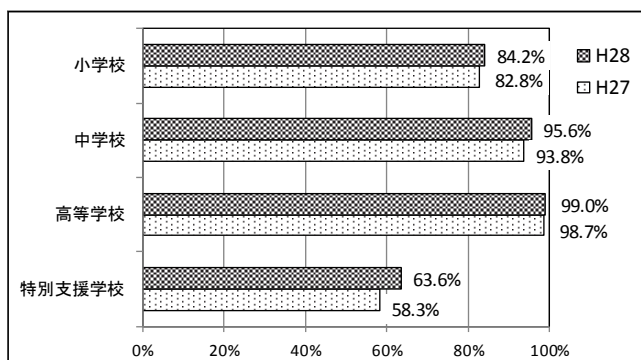


図1-2 インターネット接続機器の所持率

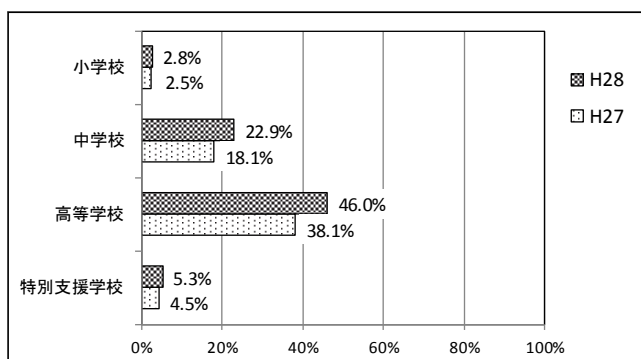


図1-3 インターネットの利用において最も長い時間利用している内容がSNSと回答している割合

2 SNS利用における「豊かな人間関係づくり」の重要性

円滑な社会生活を営むためには、適切なコミュニケーション能力や自己表現能力などを基に、互いに価値の共有化を図ったり、互いの存在を理解・尊重し合ったりして、よりよい人間関係を築こうとする態度が必要である。学校教育においては、集団での活動や生活が基本となるために、学級や学校での児童生徒相互のよりよい人間関係が、児童生徒の健全な成長と深く関わってくる。このことについて、「生徒指導提要」（平成22年3月文部科学省）の「第1章 生徒指導の意義と原理」では、生徒指導の目標について次のように述べている。

自他の個性を尊重し、互いの身になって考え、相手のよさを見付けようと努める集団、互いに協力し合い、よりよい人間関係を主体的に形成していこうとする人間関係づくりとこれを基盤とした豊かな集団生活が営まれる学級や学校の教育的環境を形成することは、生徒指導の充実の基盤であり、かつ生徒指導の重要な目標の一つでもある。

すなわち、児童生徒一人一人が存在感をもち、共感的な人間関係を育みながら、自己実現を図っていく「豊かな人間関係づくり」が重要となる。

インターネットが社会に進展したことに伴い、誰もが自分の気持ちや考えをSNSなどで発信しやすくなった。しかし、その一方で、対面で会話をすることに抵抗を感じるようになったり、他者への思いやりや相手の立場に立って物事を考える態度の希薄さによりSNS上で友達関係が悪化して改善できなかったりするなど、ソーシャルスキルの不足から希薄化・閉塞化する人間関係が起因し、問題が深刻になりつつあるといった課題が先行研究で指摘されている。したがって、集団での活動を基本とする学校においては、自己の理解や他者と関わる力を身に付けさせるための意識的な取組がこれまで以上に求められている状況にあり、児童生徒のSNS利用を踏まえた「豊かな人間関係づくり」について、積極的な指導・支援の必要性が考えられる。

3 本研究のねらいと期待される成果

平成25・26年度の調査研究では、不登校の未然防止や初期対応、そして自立支援における不登校児童生徒への対応には、「児童生徒理解」と「人間関係づくり」が重要であることを明らかにした。そこで、本研究では、これまでの調査研究を基に、SNSを利用する児童生徒の実態を「学校楽しいーと」等から多面的に分析・考察し、SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の組織的・計画的な指導・支援の実現をねらいとした。

本研究の成果として期待されることは次のとおりである。

- SNSの利用状況と「学校楽しいーと」等の結果を考察することで、児童生徒のアセスメント（見立て）を深化させることができるとともに、学校不適応の早期発見や早期対応に生かす知見を明らかにすることができる。
- 「豊かな人間関係づくり」の支援・活動で効果があったアプローチや機を捉えての個別的な対応の在り方についての児童生徒理解を深め、教師の生徒指導力、対応力を向上させることにつながる。
- SNS利用の実態を踏まえて取り組む検証改善サイクルのモデルプランを提案することで、組織的・計画的に指導・支援する体制の充実を図ることができる。

第2章 教師や児童生徒のSNSに関する実態調査の結果と考察

1 教師が捉えている児童生徒の姿と人間関係づくりの取組状況

(1) 調査の目的

教師が捉えている児童生徒の姿（見方・捉え方）と「豊かな人間関係づくり」の取組状況を把握し、人間関係を豊かにする指導・支援に係る基礎データとする。

(2) 教師対象の実態調査の対象・調査内容・調査時期・調査方法等

調査対象	公立の小・中・高等学校，特別支援学校の教諭，養護教諭，管理職
人 数	小学生221人，中学生162人，高等学校160人，特別支援学校20人の計563人
調 査 名	学校生活・インターネット利用・友達関係に関する調査（教師用）
調査内容	今の児童生徒をどのように捉えているのかを「学校生活」，「友達関係」，「SNS利用」についての質問項目と，関係性が豊かになる指導・支援の取組の実態を調べる質問項目で構成
調査時期	平成27年5月～12月
調査方法	生徒指導実践力向上プログラム事業や移動講座，校内研修等の出席者に回答を依頼し，マークシート形式による質問紙調査法で実施

(3) 教師対象の実態調査の結果

ア 児童生徒の「学校生活」，「友達関係」，「SNS利用」に関する内容

質問項目のリード文は，「あなたが児童生徒と関わる中で思っていること，感じていることについて回答してください。」とし，「とても思う」，「思う」，「あまり思わない」，「思わない」の4件法の選択式で回答を求めた。

イ 児童生徒の「学校生活」に関する内容について

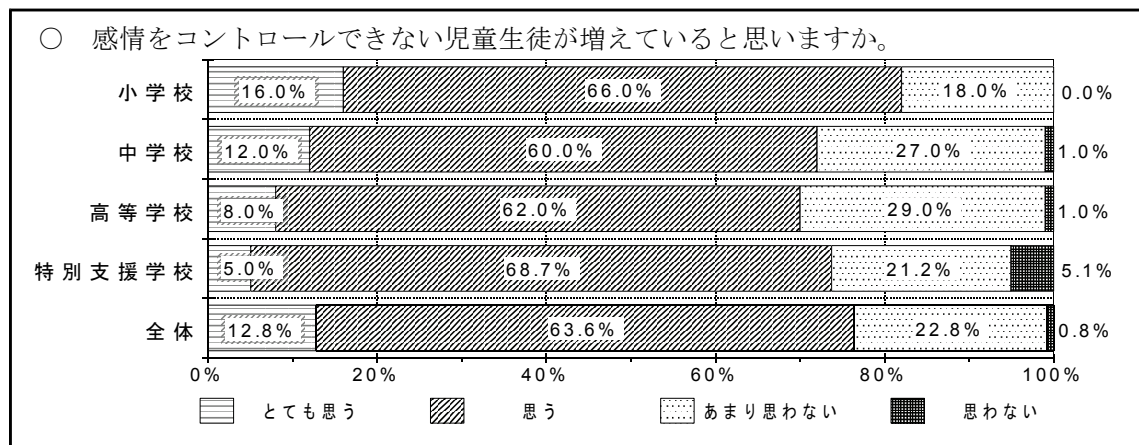


図2-1 教師の捉える児童生徒の感情コントロール

図2-1から，7割以上の教師は，感情をコントロールできない児童生徒が増えていると捉えていることが明らかになった。また，統計処理（一元配置分散分析：三つ以上の標本の平均を比較する分析）による比較分析では，小学校の教師と高等学校の教師の回答には有意な差があり，小学校の教師は高等学校の教師よりも「とても思う」，「思う」と回答している。

このことから，小学校の教師は高等学校の教師よりも感情をコントロールできない児童生徒が増えていると捉えていることが明らかとなった。

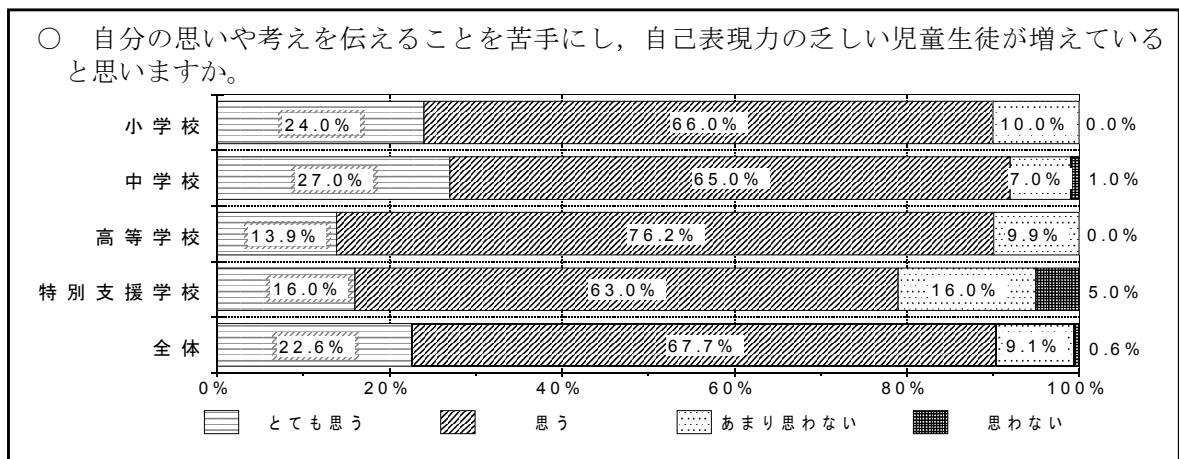


図2-2 教師の捉える児童生徒の自己表現力

図2-2から、9割以上の教師は、自己表現力の乏しい児童生徒が増えていると捉えていることが明らかとなった。「とても思う」、「思う」と回答した割合は、中学校の教師が92.0%と最も多い結果であったが、統計処理の結果、校種間に有意な差はなかった。

以上のことから、教師の多くは「感情のコントロールができない児童生徒」や「自己表現力の乏しい児童生徒」が増えていると捉えていることが明らかとなった。

(イ) 児童生徒の「友達関係」に関する内容について

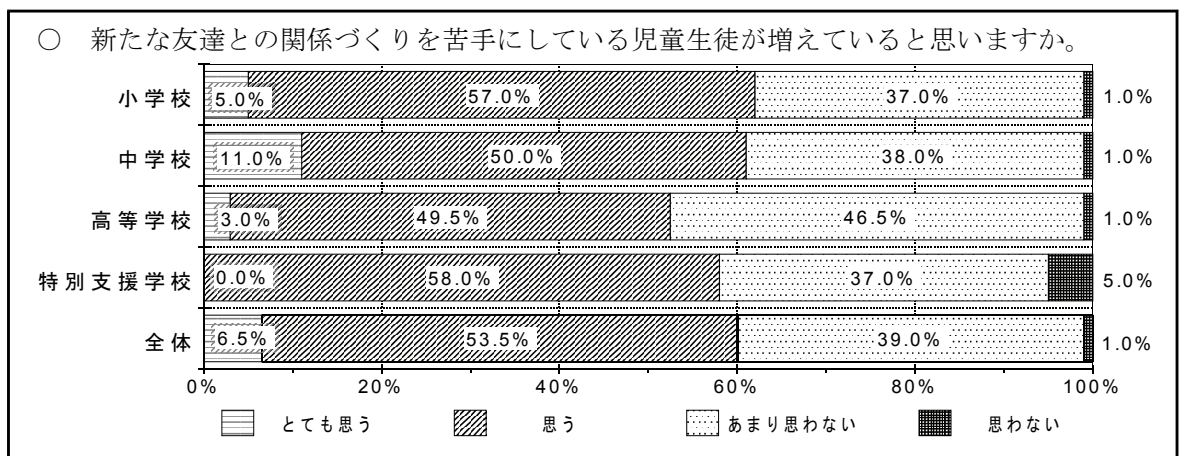


図2-3 教師の捉える児童生徒の新たな友達関係づくり

図2-3から、教師全体の6割は、新しい友達関係を築くことを苦手にする児童生徒が増えていると捉えていることが分かった。「とても思う」、「思う」と回答した割合は、小学校の教師が62.0%と最も多い結果であったが、統計処理の結果、校種間に有意な差はなかった。

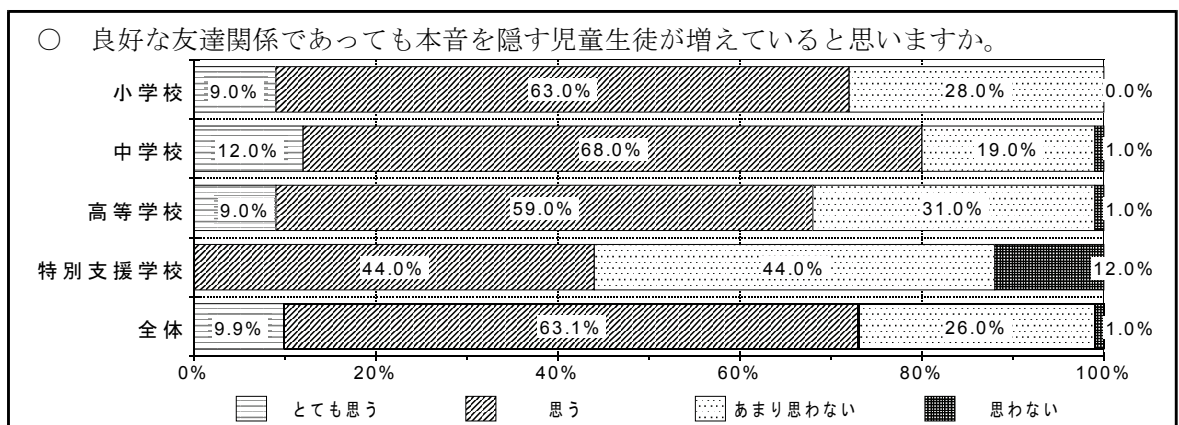


図2-4 教師の捉える児童生徒の自己開示

図2-4から、特別支援学校以外の校種において6割以上の教師は、良好な友達関係であっても本音を隠す児童生徒が増えていると捉えていることが明らかとなった。「とても思う」、「思う」と回答した割合は、中学校の教師が80.0%と最も多い結果であった。統計処理で比較分析をした結果、特別支援学校と小・中・高等学校の間に有意な差があったことから、小・中・高等学校の教師は、特別支援学校の教師よりも本音を隠す児童生徒が増えていると捉えている状況にあることが明らかとなった。

以上のことから、教師の多くは「新しい関係づくりを苦手とし、良好な関係でも本音を隠す児童生徒が増えている。」と捉えていることが明らかとなった。

(ウ) 児童生徒の「SNS利用」に関する内容について

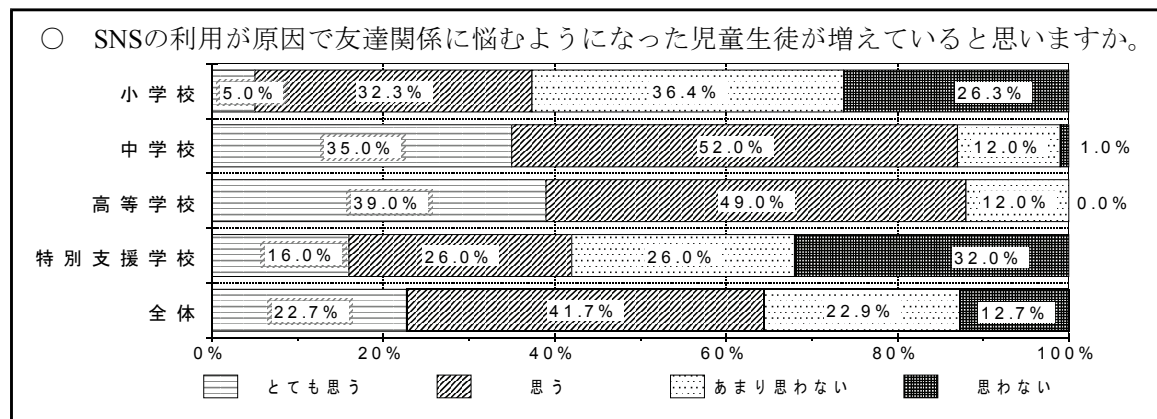


図2-5 教師の捉える児童生徒のSNS利用からの友達関係の悩み

図2-5から、中学校と高等学校の教師の8割以上は、LINEなどのSNSでのやり取りがきっかけで友達関係に悩むようになった生徒が増えていると捉えていることが明らかとなった。また、統計処理による比較分析の結果、「とても思う」、「思う」と回答した小学校・特別支援学校の教師と中学校・高等学校の教師の間に有意な差があったことから、中学校・高等学校の教師は、小学校・特別支援学校の教師より、SNSの利用で友達関係に悩むようになった生徒が増えていると捉えている状況にあることが明らかとなった。

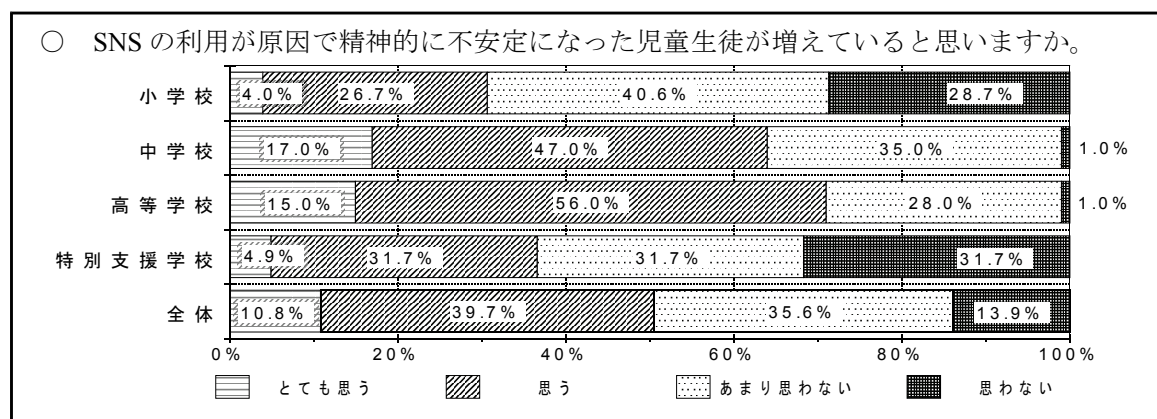


図2-6 教師の捉える児童生徒のSNS利用からの精神的な不安定感

図2-6から中学校と高等学校の教師の6割以上は、SNSの利用が原因で精神的に不安定になった生徒が増えていると捉えていることが明らかとなった。また、統計処理の結果、小学校・特別支援学校と中学校・高等学校の間に有意な差があったことから、中学校・高等学校の教師は、小学校・特別支援学校よりSNSの利用が原因で精神的に不安定になった生徒が増えていると捉えている状況が明らかとなった。

以上のことから、中学校・高等学校の教師は「SNSでのやり取りで友達関係に悩み、精神的に不安定になる生徒が増えている。」と捉えていることが明らかとなった。

イ 関係性が豊かになる指導・支援の取組の実態に関する内容

質問項目のリード文は、「年間計画、体験活動、『学校楽しいーと』の取組について回答してください。」とし、4件法の選択式で回答を求めた。

(7) 体験活動の取組の実態について

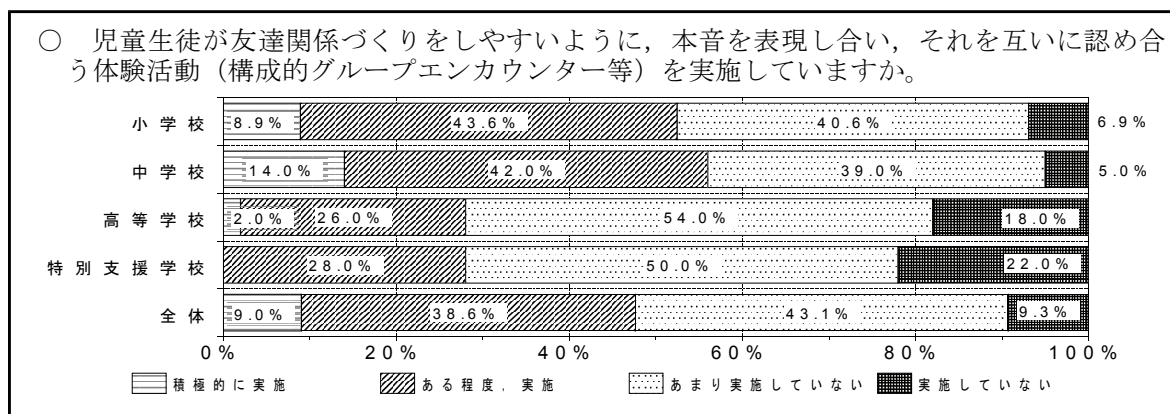


図2-7 教師の体験活動の取組の実態

図2-7から、児童生徒の友達関係づくりを促す体験活動を実施している教師については、小学校が52.5%、中学校が56.0%、高等学校が28.0%、特別支援学校が28.0%であった。統計処理で比較分析をした結果、小学校・中学校と高等学校・特別支援学校の教師の間に有意な差があったことから、高等学校・特別支援学校の教師は小学校・中学校の教師に比べて児童生徒の交友関係を促す体験活動を実施していないと回答していることが明らかとなった。

(4) 友達関係づくりに関する年間計画の作成状況について

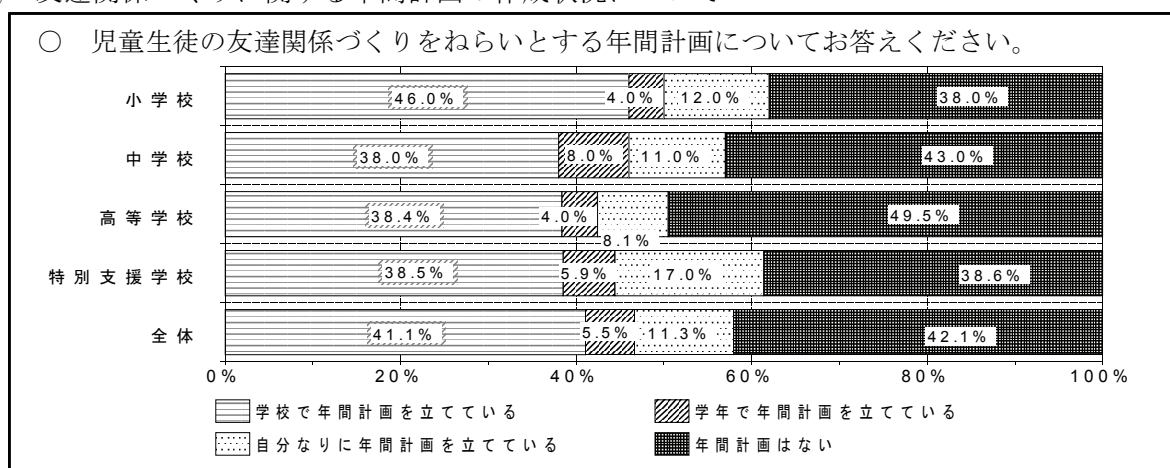


図2-8 友達関係づくりに関する年間計画の作成状況

図2-8から、児童生徒の友達関係づくりをねらいとする「年間計画はない。」と回答する教師が全体では4割を超えていた。統計処理をした結果、高等学校の教師の約半数は「年間計画はない。」と回答している状況にあり、小学校の教師との回答に有意な差があることが明らかとなった。

このことから、多くの教師は児童生徒の人間関係づくりの課題を認識して指導・支援の重要性を理解しているが、友達関係づくりを促す取組状況については、「計画的に実施していない。」と回答する教師が少なくない実態であることが明らかとなった。

2 児童生徒のSNS利用実態と学校適応感・友人関係との関連性の実態

(1) 調査の目的

児童生徒のSNS利用（テキストチャットによるメッセージのやり取り）の実態と学校適応感、友人関係との関連性を把握し、人間関係を豊かにする指導・支援に係る基礎データとする。

(2) 児童生徒対象の実態調査の方法等

調査人数	小学6年生698人，中学2年生655人，高校1年生480人，高校2年生474人の計2,307人
調査名	学校生活・インターネット利用・友達関係に関する調査
調査内容	学校適応感を調べる「学校楽しいと」の質問項目に，SNS（テキストチャットによるメッセージのやり取り）の利用実態やルール意識・負担感などの質問項目と，児童生徒の友人関係の内容の質問項目を合わせて構成
調査時期	平成27年6～12月
調査方法	1 小学校は12学級以上，中学校は6学級以上を基準に，各教育事務所管轄ごとに各1校，鹿児島市教育委員会管轄から2校を抽出して実施した。 2 高等学校は，鹿児島市内から2校，それ以外から1校を当課で抽出し，普通科高校3校，専門高校4校の7校で実施した。 3 教師対象の調査と同様，マークシート形式による質問紙調査法で実施し，質問紙は当課で回収して集約した。

(3) 児童生徒対象の実態調査の結果

ア 児童生徒のSNSの利用の実態

表2-1から，高校生のほとんどはSNSを利用しており，小学校6年生においても約半数はSNSを利用している実態があることが明らかになった。

表2-1 児童生徒のSNS利用の実態

校種・学年	小学6年生	中学2年生	高校1年生	高校2年生
SNSを利用する	333 (47.7%)	412 (62.9%)	460 (95.8%)	459 (96.8%)
SNSを利用しない	365 (52.3%)	243 (37.1%)	20 (4.2%)	15 (3.2%)
合 計	698	655	480	474

単位：人

イ 1週間当たりのSNSの利用日数

図2-9から，学年が上がるとともに毎日利用している割合が多くなっていることが明らかになった。高校2年生においては，高校1年生に比べて毎日利用している割合は少ないが，週に3～4日の利用，1～2日の利用，月に数回の利用の割合が多くなっている実態がある。

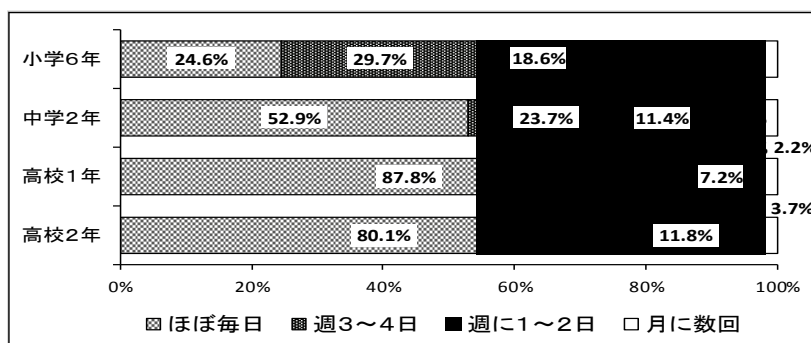


図2-9 各学年の1週間当たりのSNSの利用日数

ウ 平日にSNSを利用する時間

図2-10から、学年が上がるにつれて、2時間以上の利用の割合は多くなる傾向にあることが明らかになった。高校1・2年生においては、半数以上が1時間以上の利用時間の割合となっており、特に小学6年生から中学2年生にかけては大幅に利用時間が増える傾向にある。

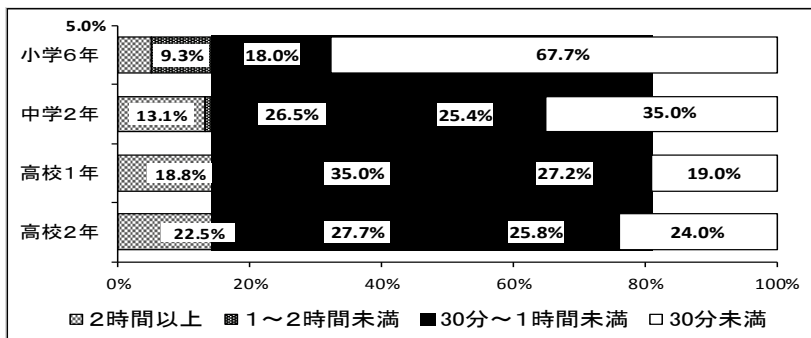


図2-10 各学年の平日にSNSを利用する時間

エ SNS利用の経験年月

図2-11から、全学年において1年以上の利用の割合が5割を超えていることが明らかになった。また、小学6年生や中学2年生の結果から、高校1・2年生よりも早くからSNSを利用し始めている児童生徒が多い実態があり、SNS利用の低年齢化が進んでいると読み取れる。

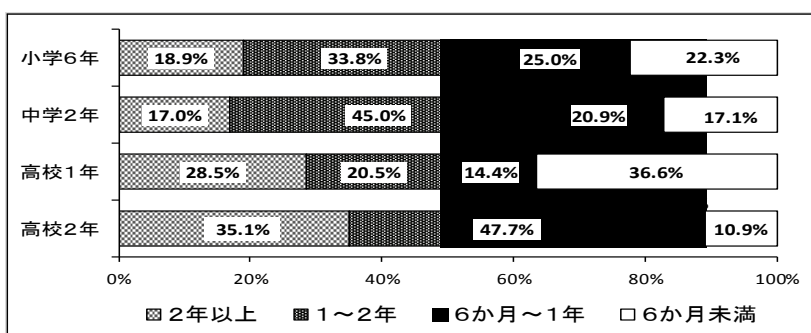


図2-11 各学年のSNS利用の経験年月

オ SNSでやり取りをする友達の人数

図2-12から、小学6年生から高校1年生は学年が上がるにつれ、人数が増える傾向がみられることが明らかになった。11人以上の友達とやり取りをする割合は、小学6年生では18.5%であるが、中学2年生は31.0%と高くなっている。

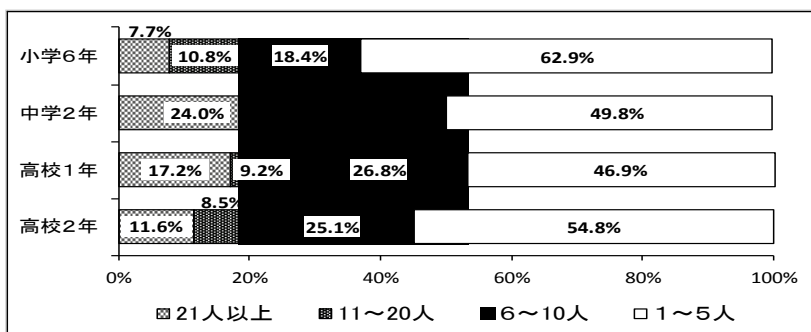


図2-12 各学年のSNSでやり取りをする友達の人数

カ SNSのやり取りをするグループ数

図2-13から、学年が上がるにつれ、グループ数が多くなる傾向にあることが明らかになった。グループ数が11以上の割合は、中学2年生から高校1年生にかけて最も増える傾向にある。

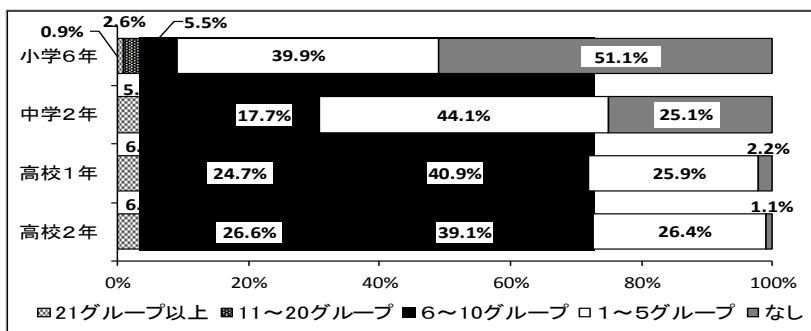


図2-13 各学年のSNSのやり取りをするグループ数

(4) SNSを利用する児童生徒と利用しない児童生徒の比較分析

学年ごとに「SNSを利用するグループ」と「SNSを利用しないグループ」に分けて、学校適応感を調べる「学校楽しいと」の友人関係^{*1}に関わる4観点、そして、休み時間や昼休みに関する質問の回答を統計処理（t検定）で比較分析した。

ア 「学校楽しいと」の4観点の比較

表2-2 SNSを利用する児童生徒としない児童生徒の「学校楽しいと」4観点の平均値と比較分析の結果

友達との関係						学級集団における適応感					
	SNSを利用しない		SNSを利用する		t検定		SNSを利用しない		SNSを利用する		t検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
小6	13.21	2.28	13.52	2.29		小6	13.04	2.37	12.97	2.17	
中2	12.55	2.18	12.96	2.08	*	中2	12.08	2.64	12.31	2.37	
高1	10.67	2.19	12.62	1.86	***	高1	10.40	2.72	12.15	2.13	**
高2	10.11	2.33	12.61	1.97	***	高2	10.56	2.31	12.44	2.27	**

自己肯定感						心身の状態					
	SNSを利用しない		SNSを利用する		t検定		SNSを利用しない		SNSを利用する		t検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
小6	11.01	2.42	11.20	2.34		小6	10.84	2.96	10.48	2.95	
中2	10.63	2.50	10.61	2.19		中2	10.67	2.82	10.08	2.96	*
高1	9.53	2.45	10.60	1.92	*	高1	10.47	2.36	9.92	2.61	
高2	9.95	2.25	10.56	1.92		高2	9.89	2.11	10.05	2.68	

- ・ 最大値は16で、数値が高いほど良好であることを示す。
- ・ t検定の*は5%水準、**は1%水準、***は0.1%水準で有意な差があることを示す。

各観点の平均値をt検定で比較分析をした結果、表2-2に示すように、小学校では「SNSを利用するグループ」と「SNSを利用しないグループ」の間に有意な差はなかったが、中学2年生では2観点、高校1年生では3観点、高校2年生では2観点で有意な差があった。観点別に有意な差があった学年を整理すると以下のようになる。

□ 友達との関係

SNSを利用する中学2年生、高校1・2年生は、SNSを利用しない生徒よりも有意に平均値が高い。

□ 学級集団における適応感

SNSを利用する高校1・2年生は、SNSを利用しない生徒よりも有意に平均値が高い。

□ 自己肯定感

SNSを利用する高校1年生は、SNSを利用しない生徒よりも有意に平均値が高い。

□ 心身の状態

SNSを利用する中学2年生は、SNSを利用しない生徒よりも有意に平均値が低い。

このことから、SNSを利用する生徒と利用しない生徒では、観点の平均値で差が見られる傾向があり、SNSを利用する生徒は、SNSを利用しない生徒よりも「友達との関係」や「学級集団における適応感」は、良好であることが明らかになった。

*1 4観点とは、「学校楽しいと」における学校適応感を調べるための6観点から「教師との関係」、「学習意欲」を除く、「友達との関係」、「学級集団における適応感」、「自己肯定感」、「心身の状態」の観点。

イ 「学校楽しいと」の下位項目の比較

表2-3 SNSを利用する児童生徒と利用しない児童生徒の「学校楽しいと」4観点の下位項目の平均値と比較分析の結果

「友達との関係」の下位項目	SNSを利用しない		SNSを利用する		t 検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
学校には、気軽に話せる友達がいる。	小6	3.53	0.60	3.60	0.55
	中2	3.46	0.62	3.49	0.57
	高1	3.00	0.49	3.42	0.60 **
	高2	2.85	0.54	3.40	0.55 ***
	高2	2.85	0.54	3.40	0.55 ***
学級には、気軽に会話ができたり、遊びに誘ってくれたりする友達がいる。	小6	3.35	0.67	3.41	0.68
	中2	3.23	0.64	3.29	0.63
	高1	2.73	0.80	3.20	0.61 **
	高2	2.70	0.70	3.20	0.57 ***
	高2	2.70	0.70	3.20	0.57 ***
学校には、自分の悩みや本当の気持ちを話せる友達がいる。	小6	3.15	0.73	3.25	0.73
	中2	2.82	0.72	2.98	0.67
	高1	2.36	0.81	2.91	0.68 **
	高2	2.11	0.75	2.85	0.62 ***
	高2	2.11	0.75	2.85	0.62 ***
自分が困っているときに助けをくれたり、協力してくれたりする友達がいる。	小6	3.24	0.69	3.34	0.65 *
	中2	3.12	0.62	3.23	0.63 *
	高1	2.73	0.69	3.12	0.54 **
	高2	2.50	0.59	3.14	0.53 **
	高2	2.50	0.59	3.14	0.53 **
「学級集団における適応感」の下位項目	SNSを利用しない		SNSを利用する		t 検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
学級の中にいると、明るく楽しい気持ちになる。	小6	3.33	0.68	3.37	0.65
	中2	3.11	0.75	3.24	0.71 *
	高1	2.80	0.57	3.11	0.69
	高2	2.70	0.78	3.13	0.63 **
	高2	2.70	0.78	3.13	0.63 **
学級のみんなと一緒に学校行事に参加したり、活動したりするのは楽しい。	小6	3.45	0.66	3.43	0.69
	中2	3.23	0.78	3.33	0.73
	高1	2.87	0.64	3.31	0.68 *
	高2	2.75	0.64	3.35	0.63 ***
	高2	2.75	0.64	3.35	0.63 ***
この学級の一員でよかったと思うことがある。	小6	3.22	0.74	3.23	0.72
	中2	2.99	0.74	3.03	0.75
	高1	2.71	0.81	3.06	0.73
	高2	2.74	0.73	3.12	0.70 *
	高2	2.74	0.73	3.12	0.70 *
学級は、目標やルールが大切にされているので、安心して居心地よく過ごせる。	小6	3.09	0.73	2.99	0.66
	中2	2.85	0.68	2.79	0.66
	高1	2.50	0.77	2.77	0.64
	高2	2.53	0.76	2.85	0.62 *
	高2	2.53	0.76	2.85	0.62 *

「心身の状態」の下位項目	SNSを利用しない		SNSを利用する		t 検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
落ち込むことがある。	小6	2.50	0.86	2.48	0.86
	中2	2.44	0.79	2.32	0.86
	高1	2.47	0.70	2.22	0.80
	高2	2.20	0.83	2.26	0.74
	高2	2.20	0.83	2.26	0.74
おなかが痛くなったり、下痢をしたりする。	小6	2.90	0.92	2.84	0.87
	中2	2.89	0.87	2.77	0.92
	高1	2.87	0.76	2.66	0.90
	高2	2.55	0.83	2.70	0.85
	高2	2.55	0.83	2.70	0.85
頭が痛くなるときがある。	小6	2.70	1.00	2.53	1.00 *
	中2	2.60	0.98	2.44	1.01
	高1	2.67	0.83	2.42	0.96
	高2	2.45	1.11	2.46	0.94
	高2	2.45	1.11	2.46	0.94
気分が悪くなることがある。	小6	2.83	0.94	2.70	0.97
	中2	2.83	0.89	2.61	0.93 **
	高1	2.64	0.75	2.67	0.85
	高2	2.68	0.75	2.63	0.85
	高2	2.68	0.75	2.63	0.85

「自己肯定感」の下位項目	SNSを利用しない		SNSを利用する		t 検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
委員会活動や係（当番）活動での自分の仕事は、みんなの役に立っていると思う。	小6	2.83	0.78	2.87	0.74
	中2	2.69	0.83	2.59	0.77
	高1	2.40	0.75	2.62	0.72
	高2	2.40	0.99	2.65	0.67
	高2	2.40	0.99	2.65	0.67
学校行事の計画や準備をやり遂げたとき、「よくがんばったなあ」「よくやったなあ」と思うことがある。	小6	3.10	0.62	3.06	0.61
	中2	2.90	0.73	2.76	0.65 **
	高1	2.50	0.69	2.75	0.61
	高2	2.73	0.80	2.67	0.58
	高2	2.73	0.80	2.67	0.58
自分には、自分なりのよいところがあると思う。	小6	2.70	1.00	2.53	1.00 *
	中2	2.60	0.98	2.44	1.01
	高1	2.45	0.83	2.46	0.96
	高2	2.67	1.11	2.42	0.94
	高2	2.67	1.11	2.42	0.94
他人から好かれている方だと思う。	小6	3.24	0.69	3.34	0.65 *
	中2	3.12	0.62	3.23	0.63 *
	高1	2.50	0.69	3.14	0.54 **
	高2	2.73	0.59	3.12	0.53 **
	高2	2.73	0.59	3.12	0.53 **

・ 最大値は4で、数値が高いほど良好であることを示す。
・ t 検定の*は5%水準、**は1%水準、***は0.1%水準を示す。

「友達との関係」、「学級集団における適応感」、「心身の状態」、「自己肯定感」の4観点の下位項目を統計処理（t 検定）で比較分析した結果、表2-3が示すように、小学6年生では2項目、中学2年生では3項目、高校1年生では5項目、高校2年生では8項目で有意な差があることが明らかになった。

このことについて、SNSを利用する児童生徒としない児童生徒の傾向と関係づくりの傾向・特徴と指導・支援の留意点をまとめたものが表2-4である。

表2-4 SNSを利用する児童生徒と利用しない児童生徒の傾向・特徴と指導・支援の留意点

下位項目	結果の傾向と特徴	指導・支援の留意点
友 達 と の 関 係	○ 高校1・2年生でSNSを利用する生徒は、SNSを利用しない生徒よりも「気軽に話せる友達がいる。」「遊びに誘ってくれる友達がいる。」「本当の気持ちを話せる友達がいる。」と回答している。	○ SNSを利用しない高校1・2年生は、気軽に話し掛けてくれる友達や本当の気持ちを話す友達がいないといった悩みを抱えやすいので、自ら友達と会話をしたり、一緒に活動できたりするような指導・支援の必要がある。
	○ 小学6年生、中学2年生、高校1・2年生のSNSを利用する児童生徒は、SNSを利用しない児童生徒よりも、「困っている時に助けしてくれる友達がいる。」と回答している。	○ SNSを利用しない児童生徒は、困っているときに助けを求めることができずに悩みやすいため、誰にでも分け隔てなく気軽に助けを求めることができるように指導・支援をする必要がある。

下位項目	結果の傾向と特徴	指導・支援の留意点
心身の状態	○ 小学6年生のSNSを利用する児童の多くが「頭が痛くなることがある。」と回答している。 ○ 中学2年生のSNSを利用する生徒の多くが「気分が悪くなることがある。」と回答している。	○ SNSを利用する児童生徒は、SNSを利用する友達との関係性の悩みが心身に表れていると考えられるため、友達に自分の考えや気持ちを伝えたり、友達とうまくいかなかったときに友達との関係をよくしたりすることができると指導・支援が必要である。
学級集団における適応感	○ SNSを利用する中学2年生と高校2年生は、利用しない生徒よりも「学級の中にいると楽しい気持ちになる。」と回答している。 ○ 高校1・2年生のSNSを利用する生徒の多くは、「学級の人々と活動するのは楽しい。」と回答している。 ○ 高校2年生のSNSを利用する生徒は、利用しない生徒よりも「この学級の一員でよかったと思う。」「学級は安心して居心地よく過ごせる。」と回答している。	○ SNSを利用しない生徒は、学級にいても孤独感を感じやすいと考えられるため、自分から友達をつくることのできるよう、関係づくりを促す指導・支援をする必要がある。 ○ SNSを利用しない生徒は、クラスの所属感が低く、居心地がよくないために不安な気持ちになりやすいと考えられる。所属感を高めるためにも、学級で決めたことを守って活動できるようになったり、あまり話をしたことの無い友達とも一緒に活動ができるようになったりする指導・支援が必要である。
自己肯定感	○ 中学2年生のSNSを利用しない生徒は、利用する生徒よりも「よくがんばったな。」「よくやった。」と回答している。 ○ 小学6年生のSNSを利用しない児童は、利用する児童よりも「自分にはよいところがある。」と回答している。 ○ 小学6年生、中学2年生、高校1・2年生のSNSを利用する児童生徒は、SNSを利用しない児童生徒よりも、「他人から好かれていると思う。」と回答している。	○ SNSを利用する生徒は、達成感を実感できる場面が少ないと考えられるため、努力していることを認める指導・支援が必要である。 ○ SNSを利用する児童は、自分のよさが分からないことで悩みやすいと考えられるため、自分の良さに気付くことのできる指導・支援が必要である。 ○ SNSを利用しない児童生徒は、「みんなから好かれているとは思わない。」という自己嫌悪感を抱きやすいため、自分の思いや考えを伝えられる場面を設定し、友達からの承認を実感できるように指導・支援が必要である。

ウ 休み時間や昼休みに関する質問の回答比較

表2-5 SNSを利用する児童生徒と利用しない児童生徒の休み時間や昼休みに関する質問項目の平均値とt検定の結果

休み時間や昼休みの「友達との過ごし方」		SNSを利用しない		SNSを利用する		t 検定	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
		小 6	3. 63	0. 60	3. 73	0. 57	*
休み時間や昼休みに友達と一緒に会話をしたり、遊んだりしている。	中 2	3. 49	0. 75	3. 63	0. 62		*
	高 1	2. 58	0. 77	3. 54	0. 62		***
	高 2	2. 69	0. 95	3. 49	0. 60		*
よくある＝4 ある＝3 あまりない＝2 全くない＝1							
休み時間や昼休みの「楽しさ」		SNSを利用しない		SNSを利用する		t 検定	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
		小 6	3. 66	0. 58	3. 69	0. 61	
休み時間や昼休みの時間は楽しい。	中 2	3. 47	0. 72	3. 56	0. 66		
	高 1	2. 84	0. 69	3. 46	0. 63		**
	高 2	2. 79	0. 95	3. 35	0. 66		**
とても楽しい＝4 楽しい＝3 あまり楽しくない＝2 全く楽しくない＝1							
・ t 値は比較分析の検定統計値、検定の＊は５％水準、＊ ＊は１％水準、＊ ＊ ＊は０.１％水準を示す。							

休み時間や昼休みの内容については、「友達との過ごし方」と「楽しさ」に関する質問内容で実施し、選択式回答を数値化して平均値を算出した。表2-5は、平均値を統計処理（t検定）による比較分析をした結果である。

SNSを利用する児童生徒はSNSを利用しない児童生徒より、「休み時間や昼休みに友達と一緒に会話をしたり、遊んだりしている。」「休み時間や昼休みは楽しい。」と回答している児童生徒が多いことが明らかになった。このことから、休み時間や昼休みは、SNSを利用する児童生徒は楽しく過ごせる時間となっているが、SNSを利用しない児童生徒は、会話がしにくい、遊びにくい、楽しくないと感じている傾向が読み取れ、「学校楽しい」との「友達の関係」や「学級における適応感」の平均値が低くなる関連性も考察される。したがって、SNSを利用しない児童生徒の指導・支援においては、特に、休み時間や昼休みにSNSを利用する児童生徒と積極的に一緒に活動できる行動力を高める指導・支援が必要になると考えられる。

(5) SNSを利用する児童生徒の傾向と特徴の分析

SNSを利用する児童生徒の傾向と特徴を把握するために、「メッセージのやり取りをするときに気を付けていること」、「メッセージのやり取りをしてつながりや親しみを感じることに」、「メッセージのやり取りをして悩みや負担に感じることに」の3点から構成した質問項目で実態調査を実施した。また、児童生徒のSNSに対する意識を観点別に分析するために、これらの質問項目の回答を統計処理（因子分析）して、SNS観点を次に示す五つに整理した。

- メッセージのやり取りをするときに気を付けていること
 - ⇒ SNS観点：「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識（4項目）
 - ⇒ SNS観点：「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識（2項目）
- メッセージのやり取りをしてつながりや親しみを感じることに
 - ⇒ SNS観点：「SNS利用のやり取り」の親和性（3項目）
- メッセージのやり取りをして悩みや負担に感じることに
 - ⇒ SNS観点：「即レス（メッセージを受信後、即座に返信すること）」の悩み・負担感（2項目）
 - ⇒ SNS観点：「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感（4項目）

ア SNS観点の学年間の特徴と指導・支援の留意点

各学年の特徴を捉えるために、五つの観点と下位項目の平均値を統計処理（一元配置分散分析）し、学年比較をした結果、以下に示す特徴と指導・支援の留意点が明らかになった。

(ア) 「『SNSをめぐるトラブル』への備えの意識」の学年間比較

表2-6 「『SNSをめぐるトラブル』への備えの意識」の平均値と比較分析の結果

	平均値	標準偏差	F 値	有意差のある関係
「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	小 6 13. 67	2. 57	6. 73 ***	小 6 > 中 2 ・ 高 1 ・ 高 2
	中 2 12. 82	2. 54		
	高 1 12. 50	2. 08		
	高 2 12. 64	6. 14		

・ 最大値は16で、数値が高いほど「気を付けている」状態、低いほど「気を付けていない状態」であることを示す。

下位項目	平均値	標準偏差	F 値	有意差のある関係
住所や電話番号、メールアドレス、顔が写っている写真のことなどの情報は出さないようにしている。	小 6 3. 64	0. 69	30. 76 ***	小 6 > 中 2 ・ 高 1 ・ 高 2
	中 2 3. 40	0. 79		
	高 1 3. 26	0. 73		
	高 2 3. 16	0. 68		

とても気を付けている＝4 気も付けている＝3 あまり気をつけていない＝2 全く気を付けていない＝1

相手が不愉快な気持ちになるような内容は書かないように気を付けている。	小6	3.71	0.61	11.68	***	小6・中2>高1・高2
	中2	3.59	0.69			
	高1	3.52	0.57			
	高2	3.45	0.59			
メッセージを送る前に問題がないか確認をするように気を付けている。	小6	3.30	0.92	0.78		
	中2	3.15	0.87			
	高1	3.15	0.82			
	高2	3.24	2.74			
長時間にならないようにメッセージのやり取りをする。	小6	3.23	0.92	6.27	***	小6>中2・高1・高2
	中2	2.74	0.96			
	高1	2.64	0.84			
	高2	2.84	3.41			

とても気を付けている=4 気も付けている=3 あまり気をつけていない=2 全く気をつけていない=1

- 各下位項目の最大値は4で、数値が高いほど「気を付けている」、低いほど「気を付けていない」回答を示す。
- F値は分散分析の検定統計値、***は0.1%の有意水準を示す。

『SNSをめぐるトラブル』への備えの意識」の観点は、SNSのやり取りで相手との関係性が悪化しないように、相手の立場を気遣ってトラブルを起こさないように注意する意識である。このような意識が低いと他者への配慮が不足し、誤解するメッセージを送ってしまったり、不快な感情につながるやり取りをしてしまったりしてトラブルに発展することもある。

この観点は、4項目の下位項目から構成され、学年比較の結果、表2-6に示すように、小学6年生の平均値は高く、学年が上がるごとに低下している。このことから、SNSのトラブルへの注意力は学年が上がるにつれて低下する傾向にあることが分かった。下位項目では、「メッセージを送る前に問題がないか確認をするように気を付けている」の項目に学年間の差はなく、平均値からメッセージの送信前に確認をしている児童生徒は多いことが明らかになった。しかし、他の3項目については学年間に有意な差があり、中・高校生は、個人情報流しやすい、不快な感情にならないように気を付けない、長時間やり取りをするといった傾向にある。これらから、『SNSをめぐるトラブル』への備えの意識が低い児童生徒は、SNSを利用する相手のことを考えずにやり取りをし、それがトラブルにつながりやすいと推察される。そのため、このような児童生徒の指導に当たっては、相手の立場に立って考えられるように他者理解を深める指導・支援が必要であると考えられる。

(イ) 『SNSをめぐるトラブル』への発生後の対処の意識」の学年間比較

表2-7 『SNSをめぐるトラブル』への発生後の対処の意識」の平均値と比較分析の結果

		平均値	標準偏差	F 値	有意差のある関係	
「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	小 6	5.01	2.03	10.20	***	小 6 ・ 中 2 > 高 1 ・ 高 2
	中 2	4.71	1.80			
	高 1	4.45	1.58			
	高 2	4.41	1.40			

・ 最大値は 8 で、数値が高いほど「気を付けている」状態であることを示す。

下位項目		平均値	標準偏差	F 値	有意差のある関係	
メッセージのやり取りで嫌な気持ちになったときは、 直接、会話を気持ち伝えるように気を付けている。	小 6	2.61	1.12	1.81		
	中 2	2.62	1.02			
	高 1	2.50	0.90			
	高 2	2.50	0.84			
友達とのやり取りで困ったときは親や先生に相談する ようにしている。	小 6	2.46	1.15	21.25	***	小 6 > 中 2 ・ 高 1 ・ 高 2 中 2 > 高 2
	中 2	2.11	1.10			
	高 1	1.96	0.94			
	高 2	1.92	0.88			

とても気を付けている＝4 気も付けている＝3 あまり気をつけていない＝2 全く気をつけていない＝1

・ 各下位項目の最大値は 4 で、数値が高いほど「気を付けている」、低いほど「気を付けていない」回答を示す。

・ F 値は分散分析の検定統計値 ***は 0.1% の有意水準を示す。

『SNSをめぐるトラブル』への発生後の対処の意識」の観点は、SNSでのトラブルが発生した際に、直接、気持ちを伝えたり、親や教師に相談したりして対応しようとする意識である。この意識が低いと、トラブルが発生した時に不快な感情を友達に伝えられなかったり、保護者や教師に悩みを伝えられなかったりすると考えられる。

この観点は、2項目の下位項目から構成され、学年比較の結果、表2-7に示すように、メッセージのやり取りで嫌な気持ちになったとき、直接、会話で気持ちを伝える児童生徒は、全ての学年において、平均値が約2.5の値であったことから、自分の考えや気持ちを伝えることを苦手とする児童生徒が多いことが伺える。また、友達とのやり取りで困ったときに「親や先生に相談するようにしている。」の値は、学年が上がるごとに低下する傾向が見られた。これらから、『SNSをめぐるトラブル』への発生後の対処の意識」の低い児童生徒は、メッセージのやり取りで嫌な気持ちになった際、相手に自分の考えや気持ちを伝えず、また、保護者や教師に相談せずに対処しようとする推察される。そのため、このような児童生徒の指導に当たっては、友達や保護者、教師に自分の考えや気持ちを伝えようとする力を高めたり、友達の意見と違っても自分の意見を伝えることができるコミュニケーション力を高めたりする指導・支援が必要であると考えられる。

(ウ) 『SNSのやり取り』の親和性」の学年間比較

表2-8 『SNSのやり取り』の親和性」の平均値と比較分析の結果

		平均値	標準偏差	F 値	有意差のある関係
「SNSのやり取り」の親和性	小 6	6.69	2.62	2.45	
	中 2	6.80	2.35		
	高 1	6.58	1.93		
	高 2	6.95	1.74		

・ 最大値は12で、数値が高いほど「思わない」状態であることを示す。

下位項目	平均値	標準偏差	F 値	有意差のある関係	
友達とメッセージのやり取りを通じて、友達の気持ちを確かめることができる。	小 6	2.15	0.95	2.30	
	中 2	2.20	0.90		
	高 1	2.17	0.74		
	高 2	2.21	0.72		
友達とメッセージのやり取りをすることで、友達とのつながりをもてる。	小 6	2.07	0.95	1.32	
	中 2	2.04	0.90		
	高 1	1.97	0.73		
	高 2	2.07	0.70		
友達とメッセージのやり取りをして寂しさをすぐにまぎらわすことができる。	小 6	2.50	1.09	2.56	
	中 2	2.59	1.00		
	高 1	2.45	0.88		
	高 2	2.59	0.79		

とても思う＝4 思う＝3 あまり思わない＝2 全く思わない＝1

・ 各下位項目の最大値は4で、数値が高いほど「思わない」、低いほど「思う」回答を示す。

・ F 値は分散分析の検定統計値を示す。

表2-8からは、『SNSのやり取り』の親和性」の観点は、SNSでやり取りをすることで「友達との関係がより親密になる。」「つながっている感覚がして寂しさを感じない。」といった価値観から、SNSを利用することで互いの気持ちの理解は深まり、友達との関係はより親密になるといった意識である。この観点の意識が高いと、SNSのやり取りに夢中になったり、常につながっていたいという親和性を求めるようになっていたりする状態や、SNSのグループのメンバーとは関係を深められるが、グループ以外とは深く関わり合えないため、狭い人間関

係になってしまうことが懸念される。この観点は、3項目の下位項目から構成され、学年比較の結果、表2-8に示すように、全ての項目において有意な差は見られないことが明らかになった。また、各項目の平均値が全学年において3以下の値になっていることから、「友達の気持ちを確かめることができる。」、「つながりをもてる。」、「寂しさを紛らわすことができる。」と回答する児童生徒が多い傾向にあり、SNSのよさを実感する児童生徒の心理状態が示されているものと考えられる。これらから、SNSを利用する児童生徒はSNSを利用する友達間において親和性を高めていることが推察されるが、SNSでやり取りをしない友達とは親和性を高めにくいといった意識をもっていることも推察される。そのため、『『SNSのやり取り』の親和性』の意識が高い児童生徒の指導に当たっては、SNSでやり取りをしない友達とも関係づくりが深められるように交流する実践力を高める指導・支援が必要であると考えられる。

(エ) 「『即レス』の悩み・負担感」の学年間比較

表2-9 「『即レス』の悩み・負担感」の平均値と比較分析の結果

		平均値	標準偏差	F 値		有意差のある関係
「即レス」の悩み・負担感	小 6	5.13	2.73	6.60	***	高 1・高 2 > 小 6
	中 2	5.49	1.98			
	高 1	5.69	1.54			
	高 2	5.68	1.47			
・ 最大値は 8 で、数値が高いほど「あてはまらない」状態であることを示す。						
下位項目		平均値	標準偏差	F 値		有意差のある関係
メッセージがきたらすぐに返事することで悩んでいる。	小 6	2.60	1.10	8.67	***	高 1・高 2 > 小 6
	中 2	2.77	1.01			
	高 1	2.90	0.84			
	高 2	2.91	0.81			
友達から送られてくるメッセージをチェックすることで悩んでいる。	小 6	2.57	2.03	2.28		
	中 2	2.71	1.10			
	高 1	2.79	0.87			
	高 2	2.77	0.83			
ともあてはまる＝4 あてはまる＝3 あまりあてはまらない＝2 全くあてはまらない＝1						
・ 各下位項目の最大値は 4 で、数値が高いほど「あてはまらない」、低いほど「あてはまる」回答を示す。						
・ F 値は分散分析の検定統計値、***は0.1%の有意水準を示す。						

「即レス」とは、メッセージを受信後に即座に返信（レスポンス）することを意味する。『『即レス』の悩み・負担感』の観点は、「すぐに返事することに負担感を感じている。」、「メッセージのチェックをしないと『未読無視（メッセージを読まないで無視をする）』と思われる。」といった、SNSでやり取りをする相手が不快な感情にならないよう、すぐに返信をしなければならないといった強迫的な観念があるため、チェックや返信が気になって苦しみ悩んでいる意識の高さである。この意識の背景には、関係性を良好なまま維持したいという願いがあり、この願いが強いほど精神的に疲弊する状態にあることが推測される。

この観点は、2項目の下位項目から構成され、学年間の比較をした結果、表2-9に示すように、小学6年生は『『即レス』の悩み・負担感』を強く感じる傾向があることが明らかになった。また、全ての校種において、各項目の平均値が3以下の結果になっていることから、「悩み・負担感を感じる」と回答する児童生徒は少なくない実態であると推察される。そのため、このような児童生徒の指導に当たっては、SNSのやり取りの悩みや負担感を伝え合えるコミュニケーション力や、友達とのよりよい関係を自ら築いていく行動力を高める指導・支援が必要であると考えられる。

(オ) 「『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感」の学年間比較

表2-10 「『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感」の平均値と比較分析の結果

		平均値	標準偏差	F 値		有意差のある関係
「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	小 6	12.12	3.15	10.50	***	小 6・中 2 > 高 1・高 2
	中 2	11.99	2.88			
	高 1	11.40	2.66			
	高 2	11.63	2.60			
・ 最大値は16で、数値が高いほど「あてはまらない」状態であることを示す。						

下位項目		平均値	標準偏差	F 値		有意差のある関係
メッセージのやり取りをなかなか終わらせられないことで悩んでいる。	小 6	2.98	2.98	7.09	***	小 6・中 2 > 高 2
	中 2	2.96	2.96			
	高 1	2.83	2.83			
	高 2	2.72	2.72			
自分が送信したメッセージに対する反応がないことで悩んでいる。	小 6	3.11	3.11	5.55	**	小 6・中 2 > 高 1・高 2
	中 2	3.15	0.83			
	高 1	3.00	0.81			
	高 2	2.94	0.79			
メッセージの送信後、「あの伝え方でよかったのだろうか」と悩んでいる。	小 6	3.06	1.02	18.65	***	小 6・中 2 > 高 1・高 2
	中 2	2.96	0.97			
	高 1	2.70	0.87			
	高 2	2.64	0.87			
知らないところで自分のことについてメッセージをやり取りをしているのではないかと心配になる。	小 6	3.12	1.08	18.65	**	小 6 > 高 1・高 2
	中 2	3.00	1.01			
	高 1	2.91	0.94			
	高 2	2.92	0.98			

とてもあてはまる＝4 あてはまる＝3 あまりあてはまらない＝2 全くあてはまらない＝1

・ 各下位項目の最大値は4で、数値が高いほど「あてはまらない」、低いほど「あてはまる」回答を示す。

・ F 値は分散分析の検定統計値、***は0.1%の有意水準を示す。

「『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感」の観点は、SNSを利用する相手から嫌われないように過剰に気を遣っているため、自分の考えや気持ちを伝えられずにいたり、相手の気持ちや考えを確認できないために悩み苦しんでいる意識である。この意識が高いと、相手を不快にさせて自分が傷付くことがないように自分の気持ちや考えの自己開示をしなくなり、表面的な人間関係しかもてないという悩みを抱くようになる状態になることが推測される。

この観点は、4項目の下位項目から構成され、前述の「『即レス』の悩み・負担感」の観点と同じく、相手との良好な関係性を維持したいという思いがあるため、この意識が高いほど精神的に疲弊する状態になることが推測される。学年間の比較の結果、表2-10に示すように、高校1・2年生は「悩み・負担感を感じている」状態にある生徒が多いことが分かった。これらから、「『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感」を意識する児童生徒は、SNSでやり取りをする相手との関係性に悩み苦痛を感じている状態にあるため、自分の考えや気持ちを伝えられるように表現できるコミュニケーション力を高める指導・支援が必要であると考えられる。

イ SNSをよく利用する児童生徒の特徴

表2-11 SNSをよく利用する児童生徒とあまり利用しない児童生徒のSNS観点の平均値と比較分析の結果

■ SNSの利用状況が「毎日」，「2時間以上」		該当する児童生徒		該当しない児童生徒		t 検定
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	小 6	11.87 (15人)	2.99	13.72 (283人)	2.56	**
	中 2	10.66 (47人)	2.59	13.17 (335人)	2.35	***
	高 1	11.9 (82人)	1.95	12.62 (350人)	2.09	**
	高 2	11.35 (96人)	2.11	13.03 (345人)	6.93	*
・ 最大値は16で，数値が高いほど「気を付けている」状態，低いほど「気を付けていない状態」であることを示す。						
「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	小 6	2.93 (15人)	1.49	5.06 (283人)	1.99	***
	中 2	3.89 (47人)	1.55	4.83 (335人)	1.80	***
	高 1	4.02 (82人)	1.41	4.53 (350人)	1.60	**
	高 2	4.23 (96人)	1.24	4.46 (345人)	1.43	
・ 最大値は8で，数値が高いほど「気を付けている」状態であることを示す。						
「SNS利用のやり取り」の親和性	小 6	5.47 (15人)	2.10	6.84 (283人)	2.63	*
	中 2	5.51 (47人)	2.21	7.00 (335人)	2.30	***
	高 1	5.96 (82人)	1.67	6.72 (350人)	1.98	**
	高 2	6.04 (96人)	1.67	7.23 (345人)	1.67	***
・ 最大値は12で，数値が高いほど「思わない」状態であることを示す。						
「即レス」の悩み・負担感	小 6	4.13 (15人)	2.33	5.24 (283人)	2.79	
	中 2	5.85 (47人)	2.18	5.45 (335人)	1.93	
	高 1	5.67 (82人)	1.55	5.73 (350人)	1.52	
	高 2	5.41 (96人)	1.57	5.72 (345人)	1.44	
・ 最大値は8で，数値が高いほど「あてはまらない」状態であることを示す。						
「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	小 6	11.20 (15人)	2.91	12.24 (283人)	3.14	
	中 2	12.47 (47人)	3.07	12.01 (335人)	2.80	
	高 1	10.57 (82人)	2.88	11.66 (350人)	2.56	**
	高 2	10.54 (96人)	2.74	11.32 (345人)	2.53	**
・ 最大値は16で，数値が高いほど「あてはまらない」状態であることを示す。						
・ t 値は比較分析の検定統計値，*は5%水準，**は1%水準，***は0.1%水準を示す。						

SNSをよく利用する児童生徒を，SNSを「毎日利用する」と「2時間以上利用する」と回答した児童生徒とし，この条件に該当しない児童生徒とSNS観点の平均値を統計処理（t 検定）で比較分析をした結果，表2-11に示すように各項目の値が低い特徴が見られることが明らかになった。この結果から，「SNSをよく利用する」児童生徒の特徴を学年別にまとめる。

■ 小学6年生・中学2年生

- ・ 「『SNS をめぐるトラブル』への備えの意識」と「『SNS をめぐるトラブル』への発生後の対処の意識」の平均値が有意に低いことから，トラブルに対する備えと対処の意識は共に低い特徴がある。
- ・ 「『SNS 利用のやり取り』の親和性」の平均値が有意に低いことから，親和性の意識は高い特徴がある。

■ 高校 1 年生

- ・ 「『SNS をめぐるトラブル』への備えの意識」と「『SNS をめぐるトラブル』への発生後の対処の意識」の平均値が有意に低いことから、トラブルに対する備えと対処の意識はともに低い特徴がある。
- ・ 「『SNS 利用のやり取り』の親和性」の平均値が有意に低いことから、親和性の意識は高い特徴がある。
- ・ 「『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感」の平均値が有意に低いことから、関係性の悩み・負担感の意識は高い特徴がある。

■ 高校 2 年生

- ・ 「『SNS をめぐるトラブル』への備えの意識」の平均値が有意に低いことから、トラブルに対する備えの意識は低い特徴がある。
- ・ 「『SNS 利用のやり取り』の親和性」の平均値が有意に低いことから、親和性の意識は高い特徴がある。
- ・ 「『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感」の平均値が有意に低いことから、関係性の悩み・負担感の意識は高い特徴がある。

このような結果から、SNSをよく利用する児童生徒に見られる傾向をSNS観点別にまとめると、次のようなことが考察される。

□ 「『SNSをめぐるトラブル』への備えの意識」

この観点の意識は、SNS をよく利用する児童生徒ほど低いため、SNS をよく利用する状態になるほど、トラブルへの備えを意識しなくなることと関係している。

□ 「『SNSをめぐるトラブル』への発生後の対処の意識」

この観点の意識は、SNS をよく利用する児童生徒ほど低いため、SNS をよく利用する状態になるほど、トラブルが発生した後の対処を意識しなくなることと関係している。

□ 「『SNS利用のやり取り』の親和性」

この観点の意識は、SNS をよく利用する児童生徒ほど高いため、SNS をよく利用する状態になるほど、SNS の相手との親和性を意識するようになることと関係している。

□ 「『即レス』の悩み・負担感」

この観点の意識は、SNS をよく利用する児童生徒と他の児童生徒に意識の差がないため、SNS の利用状態と「即レス」に対する悩みや負担感は関係がない。

□ 「『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感」

この観点の意識は、SNS をよく利用する児童生徒ほど高いため、SNS をよく利用する状態になるほど、SNS のやり取りをする相手との関係性に悩み・負担感を意識するようになることと関係している。

以上のことから、児童生徒はSNSをよく利用する状態になると、トラブルの備えと対処の意識は低くなり、相手との親和性を意識するようになるが、SNSのやり取りをする相手との関係性に悩み・負担感を抱くようになることが明らかになった。

3 実態調査のまとめと考察

(1) 教師対象の実態調査について

- 教師対象の実態調査の結果からは、現在の児童生徒を「感情のコントロールができない、自己表現力が乏しい」、「新しい関係づくりを苦手にする、良好な関係でも本音を隠す」、「SNSのやり取りで友達関係に悩む、精神的に不安定になる」児童生徒が増えてたと捉えている教師が多いことが明らかになった。
- 児童生徒の友達関係づくりを促す取組状況については、「年間計画はない」と回答する教師が約4割の状況であることが明らかになった。

【考察】

多くの教師は児童生徒の人間関係づくりの指導・支援の重要性を理解しているが、その取組については積極的な実践ができない状態があることから、「豊かな人間関係づくり」のモデルプランの必要性が明確になった。

(2) 児童生徒対象の実態調査について

ア SNSを利用しない児童生徒

- SNSを利用しない児童生徒は、SNSを利用する児童生徒が多くなると、友達との会話や活動に楽しさを感じなくなったり、クラスへの所属感が低くなったりして、孤独感や疎外感を抱くようになりやすいことが明らかになった。

【考察】

SNS を利用しない児童生徒は、学級集団に対して疎外感をもち人間関係が希薄になりやすい。このことから、誰とでも分け隔てなく一緒に活動できる協調的行動力や、SNS を利用する友達とでも一緒に活動することができる適応的行動力を高める指導・支援をすることが特に必要であると考えられる。

イ SNSを利用する児童生徒

- SNSを利用する児童生徒は、SNSを利用する相手とは親しい関係を築き親和性を意識する傾向があるが、SNSの利用時間が増えると、相手を気遣ったやり取りをしなくなったり、メッセージの応答や関係性に悩んだり、負担感を抱きやすくなったりすることが明らかになった。

【考察】

SNS を利用する児童生徒は、相手の立場を考えた利用をしなくなったり、対面で自分の気持ちや思いを伝える表現行動ができずに悩みやすくなったりする傾向がある、このことから、自分の考えや気持ちを率直に表現できる行動や、相手の伝えたいことを理解することを大切にできるコミュニケーション行動を高める指導・支援が特に必要である。

第3章 「豊かな人間関係」の育成に向けた組織的・計画的な指導・支援の在り方

1 SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の三つの視点

これまでの先行研究において、豊かな人間関係については様々な表現や定義付けがなされているが、本研究では、SNSの影響を踏まえ、「豊かな人間関係」を「児童生徒一人一人が存在感をもち、共感的な人間関係を育みながら、自己実現を図ることができる人間関係」と定義した。これは、学習指導要領の配慮すべき事項にある「日ごろから学級経営の充実を図り、教師と児童生徒の信頼関係及び児童生徒相互の好ましい人間関係を育てる。」と本県の教育振興基本計画にある「集団生活の中で豊かな人間関係を構築していくために、人権尊重の涵養を図り、心の通う対人交流の能力の素地を養う。」から捉えたものである。

また、児童生徒の実態調査の結果と栃木県教育委員会の先行研究を参考にして、「豊かな人間関係」の育成を図る効果的な指導・支援を展開する視点として「自他の理解」、「他者や集団への適応」、「他者と交流する実践力」の三つに分類した。

SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の構想を、図3-1のようにまとめた。

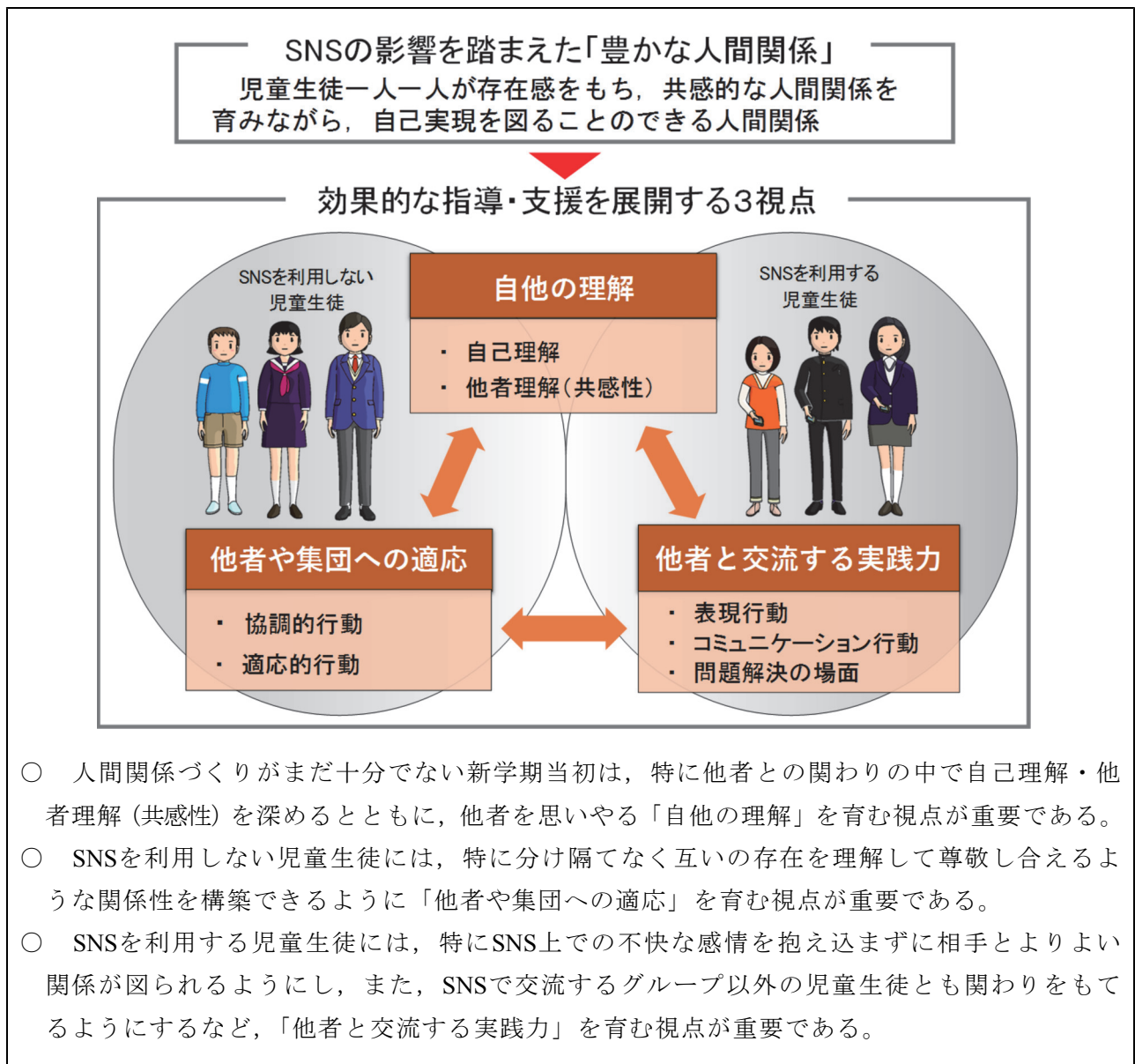


図3-1 SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の構想

豊かな人間関係を育成するためには、それぞれの視点による観点と求められる具体的な態度が必要となる。そこで、本研究では、それぞれの観点と具体的な態度を以下の表3-1のように整理した。

表3-1 SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の3視点による観点と具体的な態度

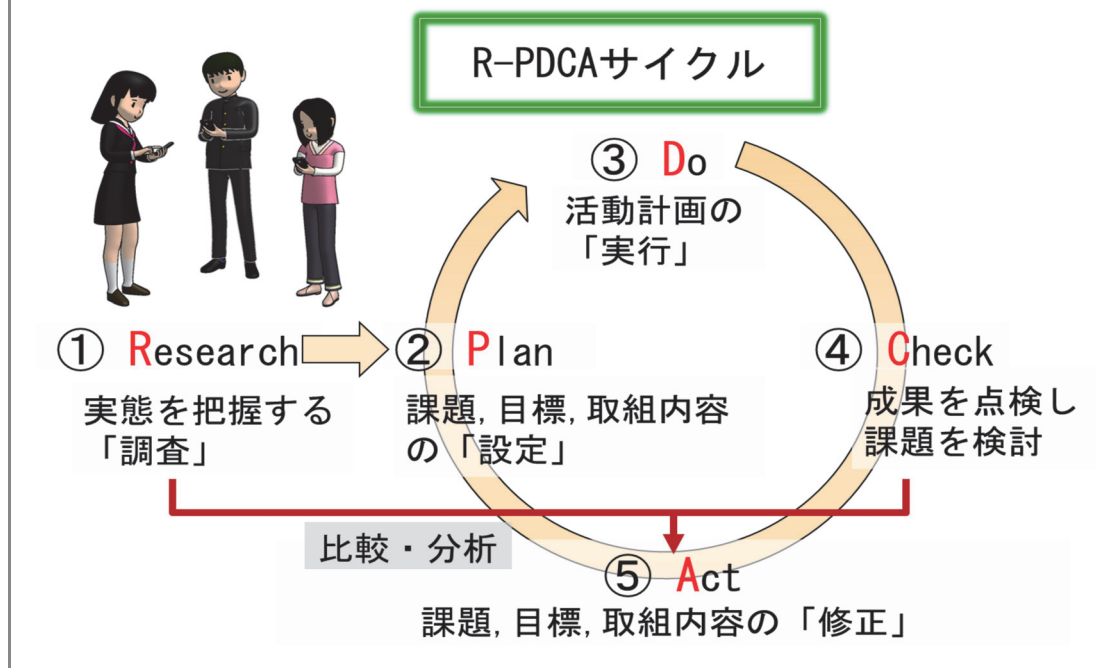
視点	観点	具体的な態度
自他の理解	自己理解	自分のよさに気付いている。
		自分の性格について分かっている。
	他者理解（共感性）	友達の考えや気持ちが分かっている。
		友達のよいところを知っている。
		友達の立場に立って考えることができる。
他者や集団への適応	協調的行動	みんなで決めたことを守って活動することができる。
		誰とでも分け隔てなく活動することができる。
	適応的行動	自分から友達をつくることができる。
		あまり話をしたことのない友達とでも一緒に活動することができる。
他者と交流する実践力	表現行動	友達の前で自分の考えや気持ちを伝えることができる。
		友達を区別することなく挨拶を交わすことができる。
	コミュニケーション行動	友達の意見と違っても自分の意見を伝えることができる。
		友達の立場を考えながら自分の考えや気持ちを分かりやすく伝えることができる。
	問題解決の場面	友達とうまくいかなかったとき、自分から友達との関係をよくすることができる。

2 サイクルで進める「豊かな人間関係づくり」

SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の年間計画を検討するに当たっては、「学校楽しいーと」などの客観的な指標を用いた実態把握を行った上で「課題」を明らかにし、「目標」、「取組内容」を設定することが必要である。また、計画通りに取組が実行できているかを定期的に「点検」することが大切である。その際、主観的・直感的なイメージで実行の可否を決定するのではなく、計画を作成する際に用いた同じ指標を用いて、確実に目標が達成されつつあるのか、児童生徒に変容が見られるかななどを客観的に評価することが求められる。そして、取組前と取組後の結果を踏まえ、「目標」や「取組内容」、「行動計画」、「方向性」などを更に見直し、新たな「行動計画」を立案することが必要となる。

このように「豊かな人間関係づくり」の年間計画では、「Research（調査から実態を把握する）→Plan（課題、目標、取組内容を設定する）→Do（活動計画を実行する）→Check（成果を点検する）→Act（課題、目標、取組内容を修正する）」の検証改善サイクル（R-PDCAサイクル）に基づいて、改善を図りながら進めていくことが大切である。次に示すのは、R-PDCAサイクルを意識して年間計画を立案するための基準である（図3-2）。

■ 「豊かな人間関係づくり」の年間計画



R : Research 調査

① 「調査」から実態を把握する。

- ・ 「学校楽しいーと」、「SNS チェックシート」等の客観的な指標に基づいた実態把握をする。

P : Plan 計画

② 課題、目標、取組内容を「設定」する。

- ・ 課題を基に、年度内に達成したい児童生徒の好ましい姿を目標として設定する。
- ・ 行動計画（目標を実現するための具体的な取組内容の年間計画）を立てる。

D : Do 実行

③ 活動計画を「実行」する。

- ・ 児童生徒の「豊かな人間関係づくり」の行動計画に基づいて実行する。
- ・ 日常の教育活動等に関する情報・資料を継続的・組織的に収集・整理する。

C : Check 点検

④ 成果を「点検」する。

- ・ 課題を捉えるための実態把握と同じ「学校楽しいーと」、「SNS チェックシート」等を用いて実施する。
- ・ 取組評価を行う際は、学校生活で見られる児童生徒の姿から「最近、クラスの雰囲気が見える。」、「楽しそうに過ごしている。」等、教師の主観的な評価で終始しないように注意する。

A : Act 修正

⑤ 課題、目標、取組内容を「修正」する。

- ・ 点検による改善方策に基づき、教育活動等の計画を見直す。

図3-2 R-PDCAサイクルによる年間計画の基準

(1) 学級活動と個別のサイクルモデル

図3-3は、SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の年間計画を検討する際に中核となる学級活動と個別対応のR-PDCAサイクルのモデル事例である。

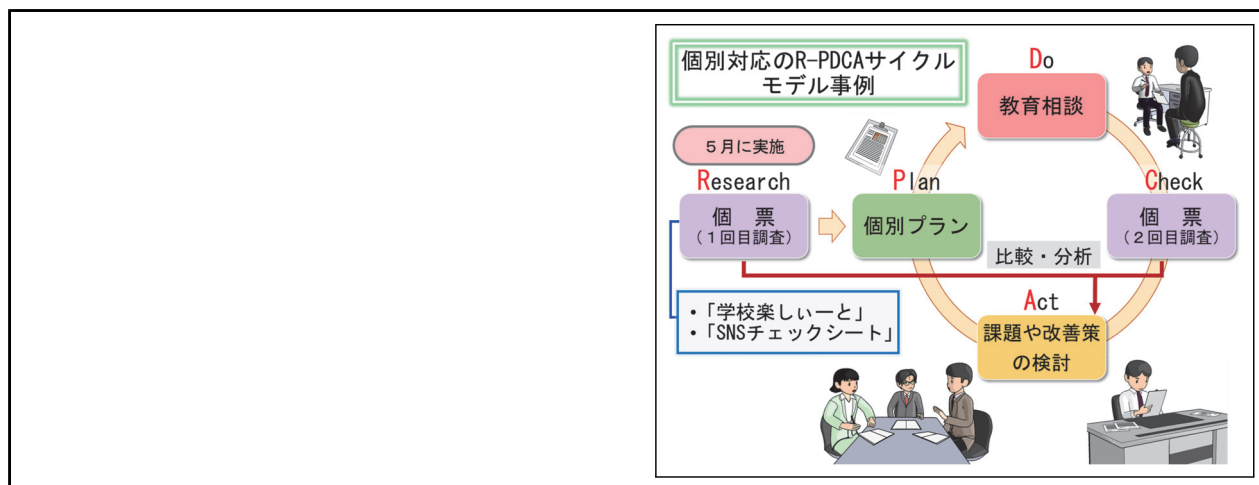


図3-3 学級活動と個別のR-PDCAサイクルのモデル事例

学級活動におけるモデル事例では、R-PDCAサイクルに基づく取組を4月～9月の期間と10月～3月の期間で進める計画を立てることを基本としている。一方、個別対応のモデル事例では、R-PDCAサイクルに基づき、個票の結果から早急に個別プランを立て教育相談や保護者面談等による確認・指導・支援を実施するとともに対応する。また、状況によっては、2回目の個別調査を実施するなど、きめ細かな対応を図らなければならないケースがあることから、個に応じたサイクルで対応を図ることを基本とする。

(2) サイクルモデルの点検と見直し

「Check（点検する）」の段階において児童生徒に期待する変容が見られなかった場合、その後の取組に向けた改善策を講じることが重要となる。国立教育政策研究所の「サイクルで進める生徒指導：点検と見直し」^{*2}では、点検を進める際の10のポイントとして、以下の観点から原因を明らかにするように示されている。

「Check」では、次のサイクルの「Do（実行）」を進める上で、見直すべき点を明確にし、行動計画を修正しなければならないが、こうしたポイントから確認することが大切となる。また、望ましい方向に変容した場合においても、「行動計画」の何が適切であったのか、どのような取組が効果的であったのかなどを評価することも大切である。

【点検を進める際の10のポイント】

- ① 「目標」の達成状況を客観的指標で確認
- ② 「課題」は実態を踏まえていたか
- ③ 「目標」は「課題」に対して適切なものだったか
- ④ 「目標」の達成につながる「行動計画」だったか
- ⑤ 「行動計画」は予定通り実行されたか
- ⑥ 「目標」を意識して取り組まれたか
- ⑦ 具体的な動きやめあてが共有されていたか
- ⑧ 児童生徒が主体的に取り組む工夫はあったか
- ⑨ 想定外の指標の変化はあったか
- ⑩ 次なるステップの設定

*2 生徒指導・進路指導研究センター 生徒指導リーフ増刊号「いじめのない学校づくり2」 平成26年6月

3 SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」のための児童生徒理解

(1) 児童生徒の実態を捉えるためのSNS質問紙「SNSチェックシート」

SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の指導・支援を行う際は、「Research」の段階において、SNSを利用する児童生徒の実態を客観的に把握できる指標が必要である。そこで、児童生徒の実態を捉えるため、実態調査の結果に基づいて「SNSチェックシート」を開発した。「SNSチェックシート」の概要は次のとおりである。

ア 「SNSチェックシート」の内容構成

質問紙は、SNSの利用状況に関する5項目の質問とSNS観点から心理状態を客観的に把握する15項目の質問の計20項目で構成されている。SNS観点に関する質問項目の回答は、「学校楽しい」と同様に最もふさわしいと思う数字の中から一つを選択する4件法とした。

次ページの図3-4は、中学生・高校生用の「SNSチェックシート」を示す。

イ 「SNSチェックシート」の実施上の留意点

(ア) 対象学年

「SNSチェックシート」は、小学校高学年以上の学年を対象に想定して作成している。

(イ) 実施上の注意

以下に「SNSチェックシート」の結果を生徒指導・教育相談の資料として活用する際の注意点を示す。

- 児童生徒を多面的・多角的に理解するために、「学校楽しい」と併せて実施することが望ましい。「SNSチェックシート」は「学校楽しい」と同時に配布し、回答の順は学級の全員が関わる「学校楽しい」から回答するよう指示する。なぜなら、「SNSチェックシート」の質問項目は、SNSを利用する児童生徒を対象に質問項目が構成されているからである。
- 回答結果については、個人情報の保護に努め、「学校楽しい」と同様に学級全員の前で結果を公表したり、特定の児童生徒と比較したりはしない。
- 回答結果は児童生徒の一面を捉えた資料であるため絶対視するものではなく、観察法・面接法等で児童生徒の理解を図ったり、他の教師と情報交換をして共通理解を深めたりするなど継続的な指導・支援に役立てる。
- 児童生徒が2回目以降の調査においても安心して回答できるよう、調査結果を否定的な見方で評価したり、叱責したりするための資料として活用しないようにする。
- 質問紙の回答の信頼性を高めるために、児童生徒が比較的落ち着いて回答できるよう、学校行事のない時期や時間帯（午前中）を設定するなどの配慮が必要である。

SNSチェックシート

－ 中学生・高校生用 －

■ 学年・組・出席番号 () 年 () 組 () 番
■ 氏名 ()

- これから、あなたのSNSの利用（メールやLINE、カカオトークなどの文字や絵文字（スタンプなど）を使ったメッセージ交換）について質問します。よく読んで、最もよく当てはまる数字一つに○を付け、回答欄にその数字を記入してください。
- 利用していない場合は答えなくてよいですが、学年・組・出席番号・名前を記入してください。

(1) あなたは、普段、メールやチャットを週にどれくらい利用していますか。

ほぼ毎日使う 4	ときどき使う (週に3～4日) 3	あまり使わない (週に1～2日) 2	ほとんど使わない (月に数回) 1
-------------	-------------------------	--------------------------	-------------------------

(2) あなたは、平日にメールやチャットをどれくらい利用していますか。だいたい時間を答えてください。

2時間以上 4	1～2時間未満 3	30分～1時間未満 2	30分未満 1
------------	--------------	----------------	------------

(3) あなたは、メールやチャットを使い始めてどれくらいになりますか。

2年以上 4	1～2年 3	6か月～1年 2	6か月未満 1
-----------	-----------	-------------	------------

(4) あなたは、チャットをするグループ〔グループチャット〕にいくつ入っていますか。

21グループ以上 4	11～20グループ 3	1～10グループ 2	グループチャットはしない 1
---------------	----------------	---------------	-------------------

(5) あなたが利用するLINEなどのSNSは学校外のメンバーが多いですか、それとも学校内のメンバーが多いですか。

ほとんどが学校のメンバー 4	学校のメンバーが多い 3	学校のメンバーが多い 2	ほとんどが学校のメンバー 1
-------------------	-----------------	-----------------	-------------------

■ メールやチャットでメッセージのやり取りをする際に、以下のことについてどの程度、気をつけていますか。

(6) 住所や電話番号、メールアドレス、顔がうつっている写真のことなどの情報は出さないようにしている。

とても気をつけている 4	気をつけている 3	あまり気をつけていない 2	全く気をつけていない 1
-----------------	--------------	------------------	-----------------

(7) 相手が不愉快な気持ちになるような内容は書かないようにしている。

とても気をつけている 4	気をつけている 3	あまり気をつけていない 2	全く気をつけていない 1
-----------------	--------------	------------------	-----------------

(8) メッセージを送る前に問題がないか確認をするようにしている。

とても気をつけている 4	気をつけている 3	あまり気をつけていない 2	全く気をつけていない 1
-----------------	--------------	------------------	-----------------

(9) 長時間にならないようにメッセージのやり取りをしている。

とても気をつけている 4	気をつけている 3	あまり気をつけていない 2	全く気をつけていない 1
-----------------	--------------	------------------	-----------------

(10) メッセージのやり取りで嫌な気持ちになったときは、直接、会話を気持ちよく伝えるようにしている。

とても気をつけている 4	気をつけている 3	あまり気をつけていない 2	全く気をつけていない 1
-----------------	--------------	------------------	-----------------

(11) メッセージのやり取りで困ったときは親や先生に相談するようにしている。

とても気をつけている 4	気をつけている 3	あまり気をつけていない 2	全く気をつけていない 1
-----------------	--------------	------------------	-----------------

■ 自分の気持ちや考えに当てはまる番号を選んでください。

(12) メールやチャットでのやり取りを通じて気持ちを確かめることができる。

とても思う 4	思う 3	あまり思わない 2	全く思わない 1
------------	---------	--------------	-------------

(13) メールやチャットでメッセージのやり取りをすることでつながりをもてる。

とても思う 4	思う 3	あまり思わない 2	全く思わない 1
------------	---------	--------------	-------------

(14) メールやチャットでメッセージのやり取りをして、さびしさをすぐにまぎらわすことができる。

■ メールやチャットでやり取りをしていて、以下のことについて悩んだり、負担に感じたりすることがあります。

(15) メッセージがきたらすぐに返事をする。

とてもあてはまる 4	あてはまる 3	あまりあてはまらない 2	全くあてはまらない 1
---------------	------------	-----------------	----------------

(16) 送られてくるメッセージをチェックすること。

とてもあてはまる 4	あてはまる 3	あまりあてはまらない 2	全くあてはまらない 1
---------------	------------	-----------------	----------------

(17) メッセージのやり取りをなかなか終わらせられないこと。

とてもあてはまる 4	あてはまる 3	あまりあてはまらない 2	全くあてはまらない 1
---------------	------------	-----------------	----------------

(18) 自分が送信したメッセージに対する反応がないこと。

とてもあてはまる 4	あてはまる 3	あまりあてはまらない 2	全くあてはまらない 1
---------------	------------	-----------------	----------------

(19) メッセージの送信後、「あの伝え方でよかったのだろうか」と悩むこと。

とてもあてはまる 4	あてはまる 3	あまりあてはまらない 2	全くあてはまらない 1
---------------	------------	-----------------	----------------

(20) 知らないところで自分のことのメッセージをやり取りしているのではないかと心配になること。

とてもあてはまる 4	あてはまる 3	あまりあてはまらない 2	全くあてはまらない 1
---------------	------------	-----------------	----------------

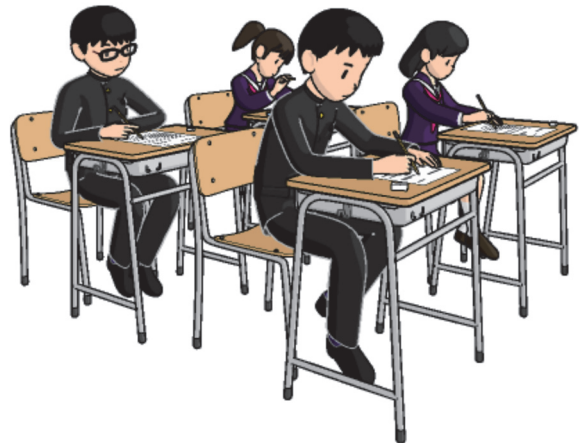


図3-4 中学生・高校生用「SNSチェックシート」

(ウ) 集計表へのデータ入力

「SNSチェックシート」の回答結果は、入力用シート（図3-5）に質問項目順に沿って入力する。個票や学級票では、データが高いほど良好な回答になるように設定している。そのために、逆転項目となる「『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感」、「『即レス』の悩み・負担感」、「『SNS利用のやり取り』の親和性」のSNS観点の下位項目は、入力したデータが自動的に変換される設定になっている。

番号	氏名	性別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1	大原台 太郎	男	1	1	1	1	4	1	1	2	1	3	3	1	1
2	宮之浦 花子	女	1	4	1	4	4	3	2	4	4	4	4	2	1
3															
4															
5															
6															

図3-5 「SNSチェックシート」回答入力用シート（一部）

(エ) 集計表へのデータ入力

a 個票

個票は、SNS利用の実態（図3-6）、SNS観点の下位項目の回答（図3-7）、各観点のバランスを示すレーダーチャート（図3-8）で構成し、1回目と2回目の回答結果を比較して個人の変容を視覚的に把握できるようにしている。

【 SNSの利用実態 】		
	1回目調査	2回目調査
(1) SNSの1週間当たりの利用日数	ほぼ毎日使う	⇒ ほぼ毎日使う
(2) 平日にSNSを利用する時間	1～2時間未満	⇒ 2時間以上
(3) SNSを使い始めてからの経験年月	1～2年	⇒ 2年以上
(4) 普段、利用しているSNSのメンバー	グループチャットはしない	⇒ 21グループ以上
(5) 普段、利用しているSNSの学校内のメンバー	学校内のメンバーは半分より少ない	⇒ 学校内のメンバーは半分より多い

図3-6 SNSの利用の実態を示す結果

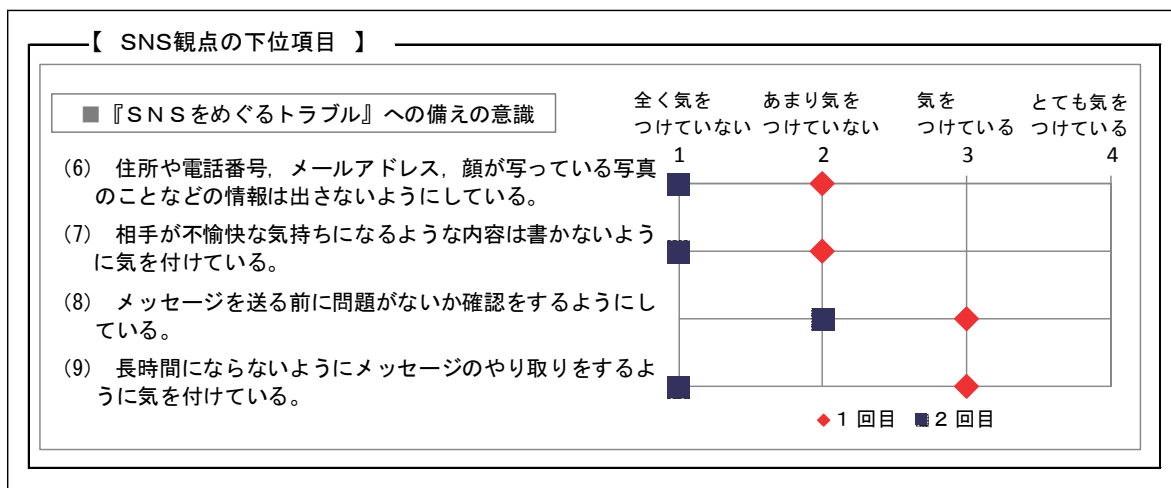


図3-7 SNS観点の下位項目の回答を示す点グラフ

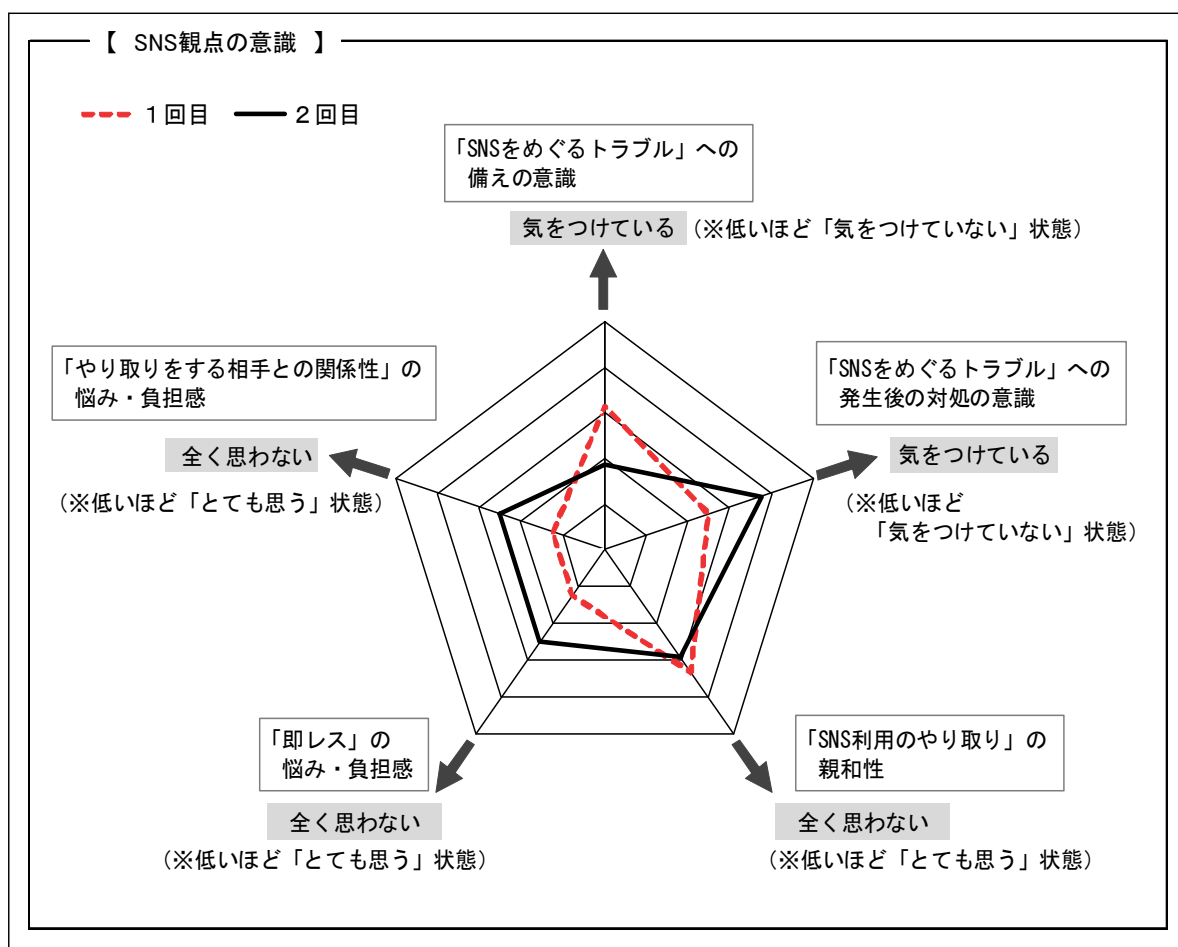


図3-8 SNS5観点のバランスを表示するレーダーチャート

b 学級内分布票

学級の結果についても1回目と2回目の回答結果を比較できるように、学級のSNS観点の下位項目の回答を示す点グラフとSNS5観点のバランスを表示するレーダーチャートに加え、学級のSNS利用の実態を示す度数分布表（図3-9）、各SNS観点の下位項目の平均値と度数分布を示す表（図3-10）、回答の割合を表示する帯グラフ（図3-11）で結果を表示し、学級の変容を視覚的に把握できるようにしている。

【 SNSの利用実態 】			
(1) SNS(メールやチャット)の利用状況		1回目	2回目
	ほぼ毎日使う	12	⇒ 16
	ときどき使う(週に3～4日くらい)	4	⇒ 2
	あまり使わない(週に1～2日くらい)	0	⇒ 1
	ほとんど使わない(月に数回)	3	⇒ 1
(2) 平日にSNSを利用する時間		1回目	2回目
	2時間以上	2	⇒ 4
	1～2時間未満	6	⇒ 4
	30分～1時間未満	5	⇒ 6
	30分未満	6	⇒ 6

図3-9 学級のSNS利用の実態を示す度数分布

【 SNS観点の下位項目 】

■「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識

4 とても気をつけている

3 気をつけている

2 気をつけていない

1 全く気をつけていない

1 回目の調査

平均	度数分布 (人)			
	4	3	2	1
3.16	7	9	2	1
3.21	7	10	1	1
2.89	7	5	5	2
2.68	6	4	6	3

2 回目の調査

平均	度数分布 (人)			
	4	3	2	1
3.25	7	11	2	0
3.20	7	10	3	0
2.90	6	7	6	1
2.70	3	10	5	2

(6) 住所や電話番号、メールアドレス、顔がうつっている写真のことなどの情報は出さないようにしている。

(7) 相手が不愉快な気持ちになるような内容は書かないように気をつけている。

(8) メッセージを送る前に問題がないか確認をするように気をつけている。

(9) 長時間にならないようにメッセージのやり取りをするように気をつけている。

⇒

図3-10 各SNS観点の下位項目の平均値と度数分布

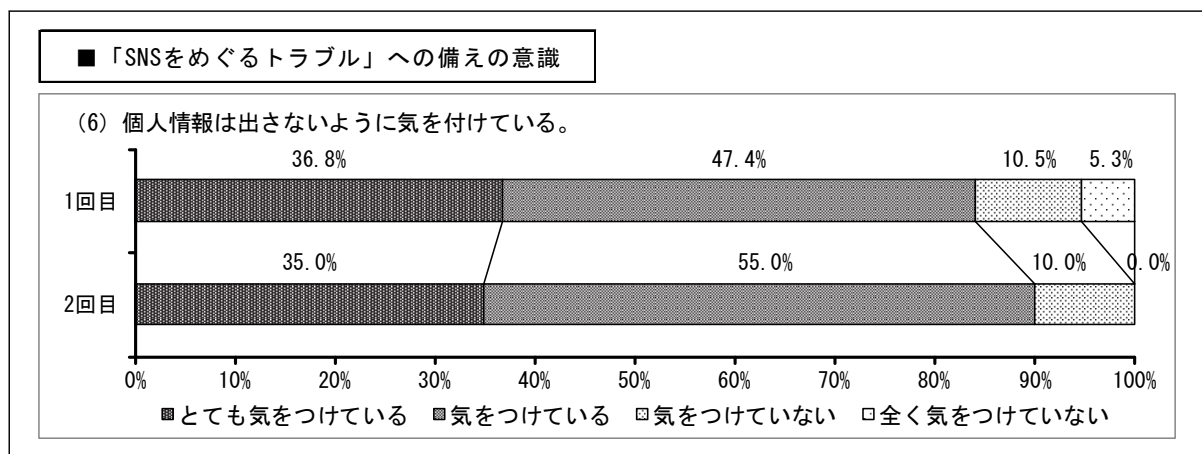


図3-11 各SNS観点の下位項目の回答の割合を表示する帯グラフ

(2) 「SNSチェックシート」と「学校楽しいと」による児童生徒理解

各SNS観点と「学校楽しいと」の各観点の関連性を統計処理（相関分析）した結果、表3-2に示す相関関係が明らかになっている。小学6年生の一例で表3-2の見方を示す（太枠の箇所）と、『SNSをめぐるトラブル』への発生後の対処の意識が高くなると「教師との関係」、「学習意欲」、「自己肯定感」、「心身の状態」、「学級集団における適応感」は正の相関関係にあることから、これらの観点の値が高くなる傾向にあると判断できる。

表3-2 「学校楽しいーと」の6観点とSNS5観点の関連

SNS5 観点	「学校楽しいーと」6観点						
	小学 6 年生	友達との関係	教師との関係	学習意欲	自己肯定感	心身の状態	学級集団における 適応感
	「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	.135* 正の相関	.138* 正の相関	.188** 正の相関	.152** 正の相関	—	.165** 正の相関
	「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	—	.138* 正の相関	.268** 正の相関	.300** 正の相関	.138* 正の相関	.206** 正の相関
	「SNS利用のやり取り」の親和性	—	-.138* 負の相関	—	—	—	-.135* 負の相関
	「即レス」の悩み・負担感	—	—	—	—	—	—
	「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	.125* 正の相関	—	.180** 正の相関	.198** 正の相関	.227** 正の相関	.171** 正の相関
SNS5 観点	「学校楽しいーと」6観点						
	中学 2 年生	友達との関係	教師との関係	学習意欲	自己肯定感	心身の状態	学級集団における 適応感
	「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	—	.246** 正の相関	.290** 正の相関	.163** 正の相関	—	.122* 正の相関
	「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	.123* 正の相関	.323** 正の相関	.249** 正の相関	.208** 正の相関	—	.198** 正の相関
	「SNS利用のやり取り」の親和性	-.236** 負の相関	—	—	-.107* 負の相関	—	-.144** 負の相関
	「即レス」の悩み・負担感	—	-.118* 負の相関	—	—	—	-.134** 負の相関
	「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	.168** 正の相関	—	—	—	.209** 正の相関	—
SNS5 観点	「学校楽しいーと」6観点						
	高校 1 年生	友達との関係	教師との関係	学習意欲	自己肯定感	心身の状態	学級集団における 適応感
	「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	—	.127** 正の相関	.318** 正の相関	.155** 正の相関	—	—
	「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	.176** 正の相関	.204** 正の相関	.254** 正の相関	.225** 正の相関	—	.129** 正の相関
	「SNS利用のやり取り」の親和性	-.158** 負の相関	—	-.119* 負の相関	-.178** 負の相関	—	-.157** 負の相関
	「即レス」の悩み・負担感	—	—	—	—	—	—
	「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	.173** 正の相関	—	.125** 正の相関	.098* 正の相関	.307** 正の相関	.108* 正の相関
SNS5 観点	「学校楽しいーと」6観点						
	高校 2 年生	友達との関係	教師との関係	学習意欲	自己肯定感	心身の状態	学級集団における 適応感
	「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	—	—	.180** 正の相関	—	—	—
	「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	.184** 正の相関	.213** 正の相関	.135** 正の相関	.198** 正の相関	—	.157** 正の相関
	「SNS利用のやり取り」の親和性	-.171** 負の相関	.095* 正の相関	—	-.124** 負の相関	.198** 正の相関	-.107* 負の相関
	「即レス」の悩み・負担感	.111* 正の相関	—	—	—	—	.095* 正の相関
	「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	.212** 正の相関	.115* 正の相関	—	—	.269** 正の相関	.151** 正の相関

・ 数値はPearsonの相関係数を示し、相関の強さを意味する（正の値は大きいほど正の相関関係は強くなり、負の値は大きいほど負の相関関係は強くなる。）。

・ *は5％、**は1％の有意水準を示し、「—」の表記は有意水準がない相関関係にあることを意味する。

このようなことから、「学校楽しいーと」による実態とSNS観点の実態を関連付けてアセスメントをすることにより、児童生徒理解を多角的・多面的にアプローチすることができる。また、不登校等の問題行動の未然防止といった予防的な視点やよりよい人間関係づくりを促す開発的な視点に立った教育相談等の実践にも活用できる。

(3) 「SNSチェックシート」を利用したアプローチ

「SNSチェックシート」の結果から五つのSNS観点は、第2章で示した実態調査の結果が示すように、学年間や利用の実態において特徴や傾向が確認できる。また、五つの観点の関連性を統計処理（相関分析）した結果、全ての学年に共通して『「即レス」の悩み・負担感』と『「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感』の観点に正の相関関係があることが明らかになっている（表3-3）。

表3-3 SNS観点とSNS観点の相関分析結果

SNS観点				
S N S 観 点	小学6年生	「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	「SNS利用のやり取り」の親和性
	「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	.413** 正の相関		
	「SNS利用のやり取り」の親和性	—	-.152** 負の相関	
	「即レス」の悩み・負担感	—	—	.225** 正の相関
	「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	—	—	.218** 正の相関
SNS観点				
S N S 観 点	中学2年生	「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	「SNS利用のやり取り」の親和性
	「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	.510** 正の相関		
	「SNS利用のやり取り」の親和性	—	—	
	「即レス」の悩み・負担感	—	-.097* 負の相関	.160** 正の相関
	「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	—	-.140** 負の相関	.125* 正の相関
SNS観点				
S N S 観 点	高校1年生	「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	「SNS利用のやり取り」の親和性
	「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	.509** 正の相関		
	「SNS利用のやり取り」の親和性	—	—	
	「即レス」の悩み・負担感	—	—	.166** 正の相関
	「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	—	.112* 正の相関	.150** 正の相関
SNS観点				
S N S 観 点	高校2年生	「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	「SNS利用のやり取り」の親和性
	「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	.184** 正の相関		
	「SNS利用のやり取り」の親和性	—	—	
	「即レス」の悩み・負担感	-.150** 負の相関	—	.182** 正の相関
	「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	—	—	.161** 正の相関

・ 数値はPearsonの相関係数を示し、相関の強さを意味する（正の値は大きいほど正の相関関係は強くなり、負の値は大きいほど負の相関関係は強くなる。）。

・ *は5%、**は1%の有意水準を示し、「—」の表記は有意水準がない相関関係にあることを意味する。

このことから、『「即レス」の悩み・負担感』を感じている児童生徒を指導・支援する場合、『「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感』を軽減することが有効なアプローチとなる。アプローチは、集団での活動場面で自分の考えや気持ちを表現できる取組を実施することや、教育相談場面で悩み・負担感をカウンセリングの姿勢（傾聴・受容・共感）で対応することなどが考えられる。よって、児童生徒一人一人の状態等に応じた指導・支援の充実を図っていく上で、SNSを利用する児童生徒のもつ特徴や傾向を適切に理解し把握することは、個別指導や学級経営の年間計画などを検討する上でも非常に大切である。

第4章 SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の指導・支援の実践

1 SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の年間計画について

「豊かな人間関係づくり」を促進する活動には、リレーション（触れ合い）づくりを目的とする構成的グループエンカウンターや社会的スキルの習得を目的とするソーシャルスキルトレーニングなど様々な活動内容が考えられる。本章では、SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の具体的な年間計画について、学級活動における年間計画例と個別の指導・支援例を示す。そこでは、第3章で述べたように、R-PDCAに基づく年間計画であること、「自他の理解」、「他者や集団への適応」、「他者と交流する実践力」の三つの観点から「豊かな人間関係づくり」を育成することを目標にした年間計画であることとして、当センターが校種別に作成した内容である。年間計画例では、活動と三つの観点との関連を○印によって示している。概要は以下のとおりで、詳細はpp. 93～101に掲載している。また、pp. 102～104に研究提携校による授業の実践例も載せているので、年間計画例と併せて参考にし、各学校の実践の参考にしていきたい。

(1) 校種別年間計画の概要 ※詳細はpp. 93～101で記す。

	学級活動の年間計画（学級プラン）	個別の指導・支援計画（個別プラン）
小学校	SNSを利用する児童が学級の半数で、自己肯定感が低く心身の状態が不安定な児童が2～3人いる学級の指導例	スマートフォンを所持しており、特異な行動を取る第6学年男児への個別指導・支援例
中学校	SNS利用のグループが固定化し、トラブルも表面化し始める一方、不登校や自己肯定感の低い生徒もいる学級の指導例	LINEのグループトークで友人関係に悩む第3学年女子生徒への個別指導・支援例
高等学校	SNS利用のやり取りが多く、良好な友人関係ができていますが、一方で不登校経験者や自己肯定感が低い生徒もいる学級への指導例	SNSを利用しているが、自己肯定感が低く、「『即レス』の悩みや負担感」のある第1学年女子生徒への個別指導・支援例

(2) 年間計画を作成する上での重要なポイント

「豊かな人間関係づくり」を育む指導・支援の重要となるポイントを次のように示す。

- 活動の内容と「自他の理解」、「他者や集団への適応」、「他者と交流する実践力」の関連性を明確にする。
- 年間を見通した教育活動を通して、「豊かな人間関係づくり」が深まるように段階的なねらいをもって発展させる。
- 生徒の実態に合った多様な教育活動を用意し、児童生徒一人一人が協働で話し合いながら主体的・意欲的な活動がより質の高いものになるようにする。
- 特別活動で行う教育活動が単なる話し合いや体験活動に終始しないように留意し、日常生活に還元するためにも、「導入過程」、「展開過程」、「シェアリング（振り返り）過程」といった展開を重視する。
- 各教科等における指導と有機的に関連させながら、「豊かな人間関係づくり」を育む教育活動を実施していく。

2 「豊かな人間関係づくり」の年間計画例（学級プラン・個別プラン）

各校種のR-PDCAサイクルに基づいた「豊かな人間関係づくり」の事例を紹介する。

(1) 小学校におけるSNSの影響を踏まえた年間計画例

ア 学級プラン（1～2学期間：R→P→D→C→A→Dの1サイクル）対象学年：第6学年

期	活動内容	「豊かな人間関係づくり」の3観点		
		理解	適応	実践力
1 学 期 前 半	R : Research 調査 ☐ 学級のSNS利用等の実態を把握する。 ・ 「学校楽しいーと」, 「SNSチェックシート」を実施する。 ・ 調査結果に基づく全員対象の簡単な面談, 前学年担任への聞き取りや家庭訪問等で個別の情報収集をする。	○ ○		
	P : Plan 計画 ☐ 学級の「課題」, 「目標」, 「取組内容」を設定する。 〔課題〕 「学校楽しいーと」等の調査結果から学級全体としては、学級集団における適応感や友達との関係等、良好な結果が得られている。しかし、各個票から自己肯定感が低かったり、心身の状態が不安定だったりするなど、個別支援を必要とする児童が2～3人見られる。また、SNS利用等の調査結果から、トラブルを経験した児童はいないものの、半数近くの児童が利用しており、早い段階でSNS利用について長所・短所、利用上の注意点等について考えさせる必要性がある。 〔目標〕 SNSの影響を考えた「豊かな人間関係づくり」授業プランの活動を通して、学級全体での「自他の理解」, 「他者や集団への適応」を高めるとともに、SNSの影響による友人関係を考慮した人間関係づくりについてSNS利用の長所・短所、利用上の注意点等の理解を深める。 また、児童それぞれが個々の特性を理解し、よりよい集団づくり、人間関係づくりを推進しようとする態度を育成する。 〔取組内容〕 ※ 以下の実行例を参照。			
1 学 期 半 ば	D : Do 実行例 ☐ 自己理解・他者理解や自己開示・相互理解を中心に、新しい学級集団への適応を図る。 ・ 全員を対象とした面談を通して、それぞれの児童によさを伝える〔個別に支援を要する児童は個別のR-PDCAサイクルによる対応を継続する〕。 ・ エクササイズ「すごろくトーク」や「二者択一」を実施し、児童自身の自己開示や友達の話の聴くことを通して、自己理解と他者理解を促す。 ・ ビデオフォーラム（SNS利用における「なりすまし」等）を通して、SNSを巡る利便性や危険性を理解させる。	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
	C : Check 点検			

2 学 期 前 半	☐ 児童のSNS利用等の実態を把握する。 ・ 2回目の「学校楽しいーと」,「SNSチェックシート」を実施する。 A : Act 修正 ☐ 「目標」を修正する。			
	SNS 利用におけるトラブル等は発生していないが, SNS に関心をもったり, 利用者が増えていく傾向が見られたりしたため, 更によりよい集団づくり, 人間関係づくりを意識しながら, 授業プランを通した SNS 利用について理解を深めるような取組を推進する。			
2 学 期 後 半	D : Do 実行例 ☐ SNSでの陥りやすい事例を通して, SNSの使い方を振り返らせ, 学級全体の人間関係がより親密で和やかなものになるようにする。 ・ エクササイズ「SNSで伝える『いいところ探し』」を通して, 自分や友達によさに気付かせるとともに, 受け取る他者の立場に立った表現について考えさせる。 ・ エクササイズ「短所は長所, SNSによるリフレーミング相談」を通して, 長所・短所をリフレーミングすることで, 自他のよさを認めさせる。 ・ エクササイズ「SNSでも使える上手な断り方」を通して, SNSでのやり取りをやめたい時, できない時にどのような上手な断り方や表現方法があるかを知り, 他者理解を促進させる。	○	○	○
		○	○	○

イ 個別プラン（1学期間：R→P→D→C→A→Dの1サイクル）

期	活動内容	「豊かな人間関係づくり」の3観点		
		理解	適応	実践力
1 学 期 前 半	R : Research 調査 ☐ 学級のSNS利用等の実態を把握する。 ・ 「学校楽しいーと」,「SNSチェックシート」の結果（レーダーチャートのバランス）から気になる児童をスクリーニングする。 ・ スクリーニングした児童は, 学年会や教育相談係会, 生徒指導部会等でアセスメントし, 見立て・手立てを策定する。			
	P : Plan 計画 ☐ 個別の「課題」,「目標」を設定する。			
「課題」 男子児童Aは, 特異な行動をとるなど特性が顕著で, 友達とのコミュニケーション不足から集団での活動が苦手な児童である。家族と連絡をとるためにスマートフォンを所持している。現段階では, SNS に関心はない。 「目標」 家庭との連携を密に図りながら, Aの心の安定が図られるようにするとともに, 班活動や集団活動においてトラブルを未然に防いだり, 孤立したりしないような手立てを講じる。				

1 学 期 半 ば	D : Do 実行例			
	☐ 日常の観察，継続的な面談を実施し，心の安定を図る。 ・ 「学校楽しいーと」の結果から，レーダーチャートのグラフの広がり小さく，特に自己肯定感が低いため，個票を基に回答に対するAの心情等に迫りながら確認する。 ・ どのようにしたら，友達と上手にコミュニケーションが図られ，協調的に活動ができるのかを，良好な状況の時の様子を思い出させながらAに気付きを促す。 ・ 授業中，休み時間等の観察を通して，Aの困り感を察知し必要に応じて適切な支援をする。	○	○	
	☐ 職員間の支援体制を確立する。 ・ 児童に関わる全ての職員で情報を共有し，協働で支援するネットワークを確立する。 ・ 特別支援教育コーディネーターと連携し，Aへの対応について支援計画を作成する。	○	○	○
1 学 期 後 半	C : Check 点検			
	☐ 個別に2回目の調査を実施し，1回目と比較する。 ・ 学年会，職員研修，生徒指導部会等でAの変容について確認するとともに，これまで実践してきた具体的な対応策についての検証を行う。	○	○	○
	A : Act 修正			
	☐ 「目標」の修正をする。 「学校楽しいーと」の個票から，心身の状態，自己肯定感の高まりが確認できた。現時点では，学級集団における適応感も良好な状態である。授業や学校行事等での活動を通して，感じたことや思ったことを自覚させながら，集団で活動できたことを評価していきたい。また，Aに関わる児童にもAに対する理解を促し，よりよい人間関係が築けるように働き掛ける必要がある。			
	D : Do 実行例			
	☐ 日常的な継続支援を行う。 ・ 授業中，休み時間等の観察を通して，Aの困り感を察知し，必要に応じて適切な支援を継続する。			○
	☐ 個別面談でソーシャルスキルトレーニングを実施する。 ・ 自分のコミュニケーションパターンに気付かせ，ソーシャルスキルトレーニングを通して，適切なコミュニケーションができるようにする。	○	○	○
	☐ 授業・係活動等でのグループ活動の推進を図る。 ・ 構成的グループ・エンカウンター等を通したよりよい人間関係づくりを継続し，グループ活動等において自他を尊重し，思いやりのある適切な言動を身に付けさせる。		○	○

(2) 中学校におけるSNSの影響を踏まえた年間計画例

ア 学級プラン（1～2学期間：R→P→D→C→A→Dの1サイクル）対象学年：第3学年

期	活動内容	「豊かな人間関係づくり」の3観点		
		理解	適応	実践力
1 学 期 前 半	R : Research 調査 ☐ 学級のSNS利用等の実態を把握する。 ・ 「学校楽しいーと」, 「SNSチェックシート」を実施する。 ・ 調査結果に基づく全員対象の簡単な面談, 家庭訪問, 前学年担当から情報収集を行う。	○		
	P : Plan 計画 ☐ 学級の「課題」, 「目標」, 「取組内容」を設定する。 〔課題〕 最上級生として, 学校のリーダーとしての自覚をもった行動が望まれるが, グループの固定化, SNS 利用によって生じる問題の増加等, 人間関係を巡るトラブルが表面化してくる時期でもある。また, グループに入れず孤立感を深めている生徒, 不登校や仲間外れ等, これまでの経験から自己肯定感が著しく低い生徒もいる。 〔目標〕 SNS との正しい関わり方を理解し, 互いのよさや個性を認め合い, 思いやりの心をもって行動できる生徒を育成する。 〔取組内容〕 ※ 以下の実行例を参照。			
1 学 期 半 ば	D : Do 実行例 ☐ 自己理解・他者理解や自己開示・相互理解を中心に, 新しい学級集団への適応を図る。 ・ 全員を対象とした面談を実施し, 生徒のよさを伝える〔個別の関わりを必要とする生徒は個別のR-PDCAサイクルによる相談活動を継続する〕。 ・ エクササイズ「すごろくトークング」を実施し, 生徒自身の自己開示を促しながら人間関係づくりを図る。	○		○
	☐ SNSの特徴や, SNSを利用する上で人間関係を大切にする注意点を学習する活動を実施する。 ・ SNSのメッセージのやり取りで生じる課題を扱ったワークシート「うまく伝わらない」を使ってグループ活動を行い, SNSと対面のコミュニケーションの違いと問題点に気付かせる。	○	○	○
2 学 期 前 半	C : Check 点検 ☐ 生徒のSNS利用等の実態を把握する。 ・ 2回目の「学校楽しいーと」, 「SNSチェックシート」を実施する。			

1 学 期 半 ば	D : Do 実行例			
	☐ 継続的な面談を実施し、不安感の解消を図る。 ・ 「～と感じていたんだね。」と、そのままを受容する姿勢を大切にした相談を継続し、相談によって不安が和らぐ経験を繰り返し行う。 ・ 自己のよいところや好きなところを表出させ、それらを肯定的に受け止め、認める経験をさせる。	○	○	○
	☐ 学級の友達との信頼関係の構築を図る。 ・ 短学活で構成的グループエンカウターのエクササイズ「リフレーミング」を行い、友達に自分の短所を長所に言い換えてもらうことで自己肯定感を高め、友達との信頼関係をつくる。	○	○	○
	☐ 職員間の支援体制を確立する。 ・ 生徒に関わる全ての職員で情報を共有し、協働で支援するネットワークを確認する。	○	○	○
1 学 期 後 半	C : Check 点検			
	☐ 個別に2回目の調査を実施し、1回目と比較する。 ・ 学年会、職員会議でどのような変容が見られたのかを確認するとともに、これまで行ってきた具体的な対応策についての検証を行う。	○	○	○
	A : Act 修正			
	☐ 「目標」の修正をする。 Bは、1回目の個票と比較して、自己肯定感が高まり、「『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感」はやや和らいだ。他の友達には自分の素直な気持ちを話せるようになってきているが、特定の友達との関係の悩みは続いているので、定期的な面談を実施していく。			
	D : Do 実行例			
	☐ 定期的な面談を実施する。 ・ 面談を重ねる中で、自分の本音を語ることが自分の不安を和らげ、自分の目指すべき方向性を見付けることができることを繰り返し経験する。	○	○	○
	☐ 学級の活動でアサーショントレーニングを実施する。 ・ ロールプレイングを繰り返しながら、自分の感情や要求、意見の適切な表現方法を身に付けさせる。 ・ シェアリングを十分に実施し、自己開示がしやすい関係づくりを図る。	○	○	○

(3) 高等学校におけるSNSの影響を踏まえた年間計画例

ア 学級プラン（１～２学期間：R→P→D→C→A→Dの１サイクル）対象学年：第１学年

期	活動内容	「豊かな人間関係づくり」の３観点		
		理解	適応	実践力
1 学 期 前 半	R : Research 調査 ☐ 学級のSNS利用等の実態を把握する。 ・ 「学校楽しいーと」、「SNSチェックシート」を実施する。 ・ 調査結果に基づく全員対象の簡単な面談，家庭訪問，中学校時の担任からの情報収集を行う。	○ ○		
	P : Plan 計画 ☐ 学級の「課題」、「目標」の設定する。 〔課題〕 学級は，規模の異なる複数の中学校から構成されており，既に SNS でやり取りをして仲のよい関係ができている生徒もいるが，中には不登校経験者や自己肯定感が著しく低い生徒もいる。 〔目標〕 互いのよさや個性を認め合い，思いやりの心をもって行動できる生徒を育成するとともに，SNS の特徴や SNS を利用する上で注意することを気付かせる。 〔取組内容〕 ※ 以下の実行例を参照。			
1 学 期 半 ば	D : Do 実行例 ☐ 自己理解・他者理解や自己開示・相互理解を中心に，新しい学級集団への適応を図る。 ・ 全員を対象とした面談を実施し，生徒のよさを伝える。また，支援を必要とする生徒については，個別のR-PDCAサイクルのプランを立て相談活動を継続する。 ・ 認知行動療法の基本的な考え方を教材化したワークシート「私ってどんな人？」を使って，自分がマイナス面と捉えている欠点を友達に長所へ言い換えてもらう体験活動を通して自己肯定感を高めながら人間関係づくりを図る。 ☐ SNSの特徴や，SNSを利用する上で人間関係を大切にすることを学習する活動を実施する。 ・ ワークシート「ショートメッセージでコミュニケーション」を使ったグループ活動を行い，ショートメッセージを使ったコミュニケーションツールの特徴とマナーについて理解を深めさせ，また，ショートメッセージの利用が対人関係や心の健康に影響を与えることについて考えさせる。 ・ ワークシート「SNS疲れとマナー」を使ったグループ活動を行い，インターネット上でのメッセージによるコミュニケーションでは，相手の状況をよく分からない状態で行ってしまうこと	○ ○	 ○	 ○

2 学 期 前 半	から一方通行になりやすい特性があることや、自分のメッセージに対して返信がないことや、いつまでも読んでくれないことに対して不安になることは、自分の受け止め方の問題であり、相手の立場を気遣う大切さについて考えられるようにする。 C : Check 点検 ☐ 生徒のSNS利用等の実態を把握する。 ・ 2回目の「学校楽しいーと」,「SNSチェックシート」を実施する。 A : Act 修正 ☐ 「目標」を修正する。 グループチャットによる人間関係の固定化が見られるようになったため、グループチャットの問題点に気付かせ、学級集団の親睦をより深めるようにする。			
	D : Do 実行例 ☐ SNSでの陥りやすい事例を通して、SNSの使い方を振り返らせ、学級全体の人間関係がより親密で和やかなものになるようにする。 ・ ワークシート「SNSと人とのつながり」を使ったグループ活動を行い、SNSのやり取りが状況によっては友達関係を悪化させていじめ構造に陥る問題があることを考えさせ、留意すべきことを気付かせる。 ・ 構成的グループエンカウターのエクササイズ「いいところ探し」を実施し、互いのよさを見付け出させて自他の理解を深めさせ、リレーション（つながり）の構築を図る。	○	○	○

イ 個別プラン（1学期間：R→P→D→C→A→Dの1サイクル）

期	活動内容	「豊かな人間関係づくり」の3観点		
		理解	適応	実践力
1 学 期 前 半	R : Research 調査 ☐ 個別のSNS利用等の実態を把握する。 ・ 「学校楽しいーと」,「SNSチェックシート」の結果から、リーダーチャートのバランスが極端に悪かったり、SNSの利用に対して不安感を抱くようになりたりしている生徒をスクリーニングする。 ・ スクリーニングした生徒は、学年会や教育相談係会にてアセスメントし、見立て・手立てを策定する。			
	P : Plan 計画 ☐ 個別の「課題」,「目標」を設定する。			

	〔課題〕 女子生徒Cは、SNSをしている友達が多いが、自己肯定感が低いことや『即レス』の悩み・負担感』があることから、精神的に不安定な状態にある。 〔目標〕 自分の素直な気持ちを話せるように継続した面談を実施したり、学級の友達に「自分は受け入れてもらえる」と感じたりできる活動を実施していく。			
1 学 期 半 ば	D : Do 実行例 □ 継続的な面談を実施し、不安感の解消を図る。 ・ 「それではダメだ」、「もっと～しなさい」と否定・批判・命令するのではなく、「～と感じていたんだね」と、そのままを受容する姿勢を大切にする。 ・ 否定的な自己と比べさせるのではなく、肯定的な自己と比べさせ、目指すべき自己の課題への気づきを促す。 □ 職員間の支援体制を確立する。 ・ 生徒に関わる全ての職員で情報を共有し、協働で支援するネットワークを確認する。	○	○	
1 学 期 後 半	C : Check 点検 □ 個別に2回目の調査を実施し、1回目と比較する。 ・ Cの「学校楽しいーと」、「SNSチェックシート」の結果や本人を観察した様子からどのように変容してきたのかを学年会、職員会議で確認するとともに、これまで行ってきた具体的な対応策についての検証を行う。 A : Act 修正 □ 「目標」を修正する。 Cは、1回目と比較して自己肯定感が高まり、『即レス』の悩み・負担感』は、やや解消された。仲のよい友達には自分の素直な気持ちを話せるようになったが、『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感』を感じるようになっているので、定期的な面談を実施していく。			
	D : Do 実行例 □ 面談でアサーショントレーニングを実施する。 ・ 自分のコミュニケーションパターンに気付かせ、ロールプレイングを繰り返しながら、自分の感情や要求、意見の適切な表現方法を身に付けさせていく。 □ グループ活動を積極的に実施し、自己開示のしやすい関係を築く。 ・ 構成的グループ・エンカウターのエクササイズ「サイコロトーク」を実施し、自分の思いや体験を語り合わせ、友達と交流できる実践力が高まるように支援する。	○	○	○
		○	○	○

3 授業の実践例（中学校）

本校の生徒指導上の課題

(1) 本校の実態

本校は市のほぼ中央部に位置し、中心部を流れる一級河川を境に北部中央市街地を校区とする。小高い常緑の森に囲まれた山陵と神社の麓にあり、薩摩国府跡の貴重な遺産など古来の文化が息づく風情豊かな地域である。「学力向上への積極的な取組」、「生徒指導の充実」、「小中一貫教育の確立」に全校生徒、教職員が一丸となって取り組んでいる。

大規模校としては、全体的に落ち着いた学校生活を送っているものの、授業への取組の点で受動的な姿が多く見られる。話し合い活動や言語活動の場面を工夫した授業形態よりも、基本的事項を重視した授業や毎時の復習テストや出題範囲が限定されたテストなどには意欲的だが、自分の考えの発表や創作活動を盛り込んだ授業においては消極的な傾向がある。

(2) 指導上の課題

数年前にLINE上での言葉を用いてのやり取りの延長から友人間のトラブルを引き起こしたり、ネット上に学校名付きで写真を投稿してしまい、ネットパトロールの指導を受けたりした事案があり、保護者に対して「持たせる上での家庭での責任」について話をしたこともあった。

本校では、原則として携帯電話（スマートフォン含む）を所持させないことを基本方針としているが、生徒の所持率は全国の統計結果に類似する形で年々増加傾向にあり、保護者にあらゆる場面で「携帯電話を使用させるなら約束事を守らせる。守れない時は使用を禁止（繰り返す時は解約）する。」という態度で向き合うように、使用についての家庭での責任について訴えている。また、携帯電話を所持することの危険性や功罪を主とした注意喚起の継続、居住区域内にある公衆無線LANスポットでの迷惑行為について指導を要する現状がある。

(3) 「学校楽しいと」、「SNSチェックシート」の調査結果の分析（5月実施）

ア 「学校楽しいと」の結果分析（最大値を16としたときの学年の平均値）

レーダーチャートからバランスを見ると、「友達との関係」や「学級集団における適応感」は良好と判断できる。「学習意欲」についてもおおむね良好であるが、上述したように決して能動的とは言えない。「心身の状態」と「教師との関係」は、改善に向けて取り組む必要性を感じる。

表4-1 「学校楽しいと」 1回目の学年平均値

	観 点	1 回目
1	友達との関係	13.4
2	教師との関係	10.2
3	学習意欲	12.1
4	自己肯定感	11.4
5	心身の状態	9.3
6	学級集団における適応感	12.6

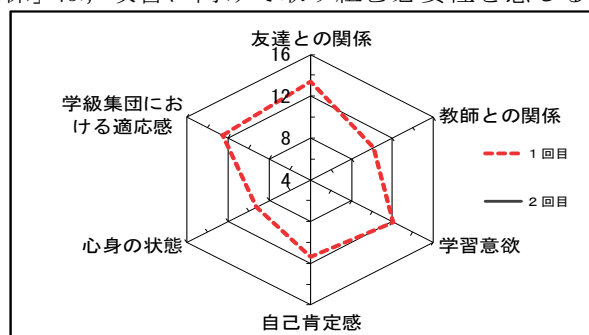


図4-1 「学校楽しいと」 1回目のレーダーチャート

イ 「SNSチェックシート」の結果分析（最大値を100としたときの学年の平均値）

『SNS利用のやり取り』の親和性との関係について、生徒自身が所持している携帯電話やスマートフォンだけではなく、保護者所有の携帯電話や学習用タブレット端末を利用してSNS上でのやり取りをしているケースもあり留意する必要がある。また、『SNS利用をめぐるトラブル』への対処の意識が低いことから、情報モラル教育の必要性を感じる。

表4-2 「SNSチェック」 1回目の学年平均値

	観 点	1 回目
1	「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	76.2
2	「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	46.5
3	「SNS利用のやり取り」の親和性	36.8
4	「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	63.1
5	「即レス」の悩み・負担感	66.2

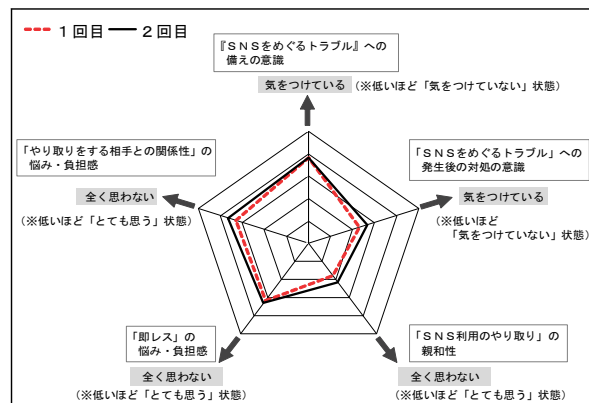


図4-2 「SNSチェックシート」 1回目のレーダーチャート

指導の実際

現代社会と私たちの生活～情報化（情報が変える社会の仕組み）～

実施日：平成28年7月8日（金）5校時

対象学年：中学校第3学年（男子21人，女子19人）

(1) 主題設定について

規範意識を構成する「思慮」、「節度」、「思いやり」、「礼儀」、「正義」等の中で，特に情報モラルに関して強く影響していると考えられている要素は「節度」や「正義」などの規範意識の高揚を主とするものが大半である。この要因を踏まえ，道徳的価値の内容項目の二つを3年社会公民的分野の単元「情報化社会」に関連させ，授業内容を構成した。

(2) 本時の内容

主 な 学 習 活 動		留意点や評価との関連
導入	1 アイスブレイクを体験する。〔5分〕 「自分との共通点を三つもつ級友を探そう。」	○ 能動的に活動できる雰囲気づくり ・ 人間関係の構図にも配慮する。 ・ 展開へとつながるような支援を行う。
展開	2 個人情報の作成をする。〔5分〕 氏名・電話番号・カミングアウト 3 ワークシートを使ったグループでの交流活動 (1) カミングアウト〔5分〕 (2) Q&Aセッション〔10分〕 4 「ネット炎上」について具体的な事例を通して学ぶ。〔15分〕 (1) コミュニティーサイトへの入口 (2) 出口の见えないトラブル	○ オープンにする内容については予めルールを説明しておく。特に，「開示の限界」について考えさせる。 ○ 発表を聞いている生徒には聞きながら質問の準備をさせておく。 ○ IT企業が提供する資料を活用して，「ネット炎上」の実態と自分たちの生活との密接度を感じさせる。 ○ ネット利用における「節度」と「正義」について考えさせる。
終末	5 本時のまとめをする。〔10分〕 (1) 「ネット炎上」の怖さ (2) 今後の生活で意識すべきこと	○ 感想文に偏らないように，自分の生活に今後どのように生かしていくかについて考えさせる。

(3) 評価

- ☐ 「スマホ上の画面＝玄関のドア」という考えを通して個人情報の管理の大切さを理解できたか。
- ☐ 今後の生活において，ネット利用時の「自他の安全」を確保していくための「節度」と「正義」の意識が備わったか。

(4) 授業後の生徒の感想（一部抜粋）

- ふざけて投稿したものが即時に何万，何百万人もの人に広がり，5年後，10年後，又は一生つきまとして自分を苦しめることに恐怖を感じた。
- 技術が進歩していくことは私たちの生活にとってとても便利なことだけど，それ以上に思いもよらない恐怖（場所を特定されたり）と隣り合わせにいることを感じた。
- 文章力をしっかり身につけてから社会に出る準備をしないといけないと強く感じました。



写真1-2 アイスブレイキングの様子



写真1-2 ワークシートを使ったグループ活動の様子

実践の検証

- (1) 「学校楽しいと」、 「SNSチェックシート」 の調査結果（5月と10月実施）の比較分析
ア 「学校楽しいと」 の結果

「学級集団での適応感」は大きく改善され、「心身の状態」、「自己肯定感」もわずかに改善された。日々の学校生活において、生徒会活動を中心に活気ある雰囲気が保たれており、「学級集団における適応感」は、体育大会や文化祭の成功に向けて全力で取り組む姿がほとんどの生徒に見られた結果と捉えている。

他の観点は、前回とほぼ同様の結果と捉えている。若干の落ち込みがある「教師との関係」、「学習意欲」、また改善傾向にあるものの低い数値で推移している「心身の状態」については、学校の現状を振り返るに、全職員で「見逃すことなく漏らすことなく」という理念の下、学力向上対策の基盤である「学習の躰」の徹底や、より高いレベルで最後まで課題解決に取り組ませる学習指導に対して、生徒たちがある種の疲労感を感じているのではないかと推察している。

表4-3 「学校楽しいと」 2回目の学年平均値

	観 点	1 回目	2 回目
1	友達との関係	13.4	13.4
2	教師との関係	10.2	10.1
3	学習意欲	12.1	11.8
4	自己肯定感	11.4	11.6
5	心身の状態	9.3	9.7
6	学級集団における適応感	12.6	13.7

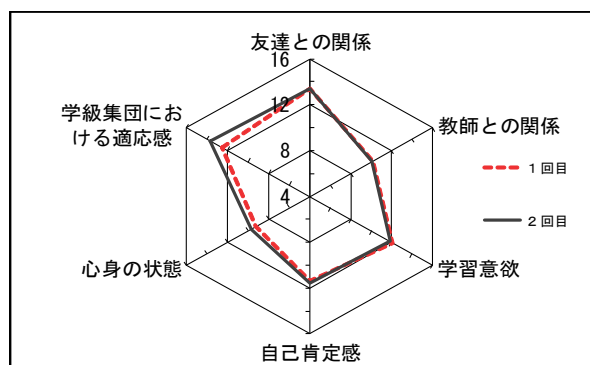


図4-3 「学校楽しいと」 2回目のレーダーチャート

- イ 「SNSチェックシート」 の結果

1回目の調査で課題となっていた『SNSをめぐるトラブル』への発生後の対処のSNS観点は、トラブルにならないための予防に重点を置いた指導を道徳や学級活動等で行った結果、意識の向上につながったものと考えられる。また、『SNS利用のやり取り』の親和性のSNS観点が良好になったのは、SNS利用で現実に発生している犯罪やトラブル、個人情報流出等の課題を基にした授業を実施することが自分のSNS利用の現状を考えるきっかけとなり、注意喚起につながったものとする。

表4-4 「学校楽しいと」 2回目の学年平均値

	観 点	1 回目	2 回目
1	「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	76.2	76.9
2	「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	46.5	53.7
3	「SNS利用のやり取り」の親和性	36.8	43.9
4	「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	63.1	66.5
5	「即レス」の悩み・負担感	66.2	73.4

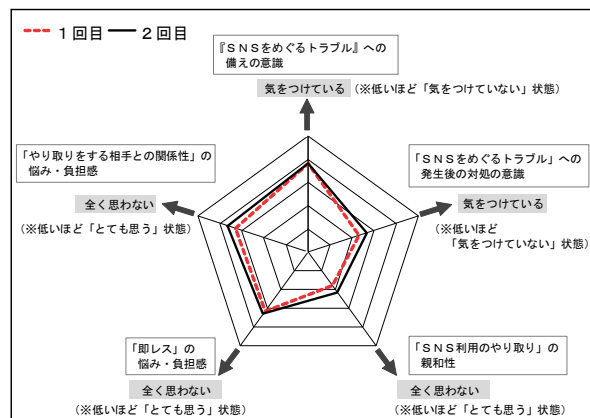


図4-4 「学校楽しいと」 2回目のレーダーチャート

- (2) 成果と課題

生徒は、SNSを巡る問題を扱った授業や道徳、学級活動を通して、「コミュニケーション能力を上げていく必要性」を実感するようになった。また、メールやネットでのやり取りをするときは、相手の反応が判断しにくいと、表情や声のトーンなどに十分配慮して、自分の思いを正確に言葉で伝えることや、相手の気持ちを正しく読み取ることの大切さに気づき、これまでの使い方を振り返る姿も見られるようになった。

携帯電話を持ち始める時期が低年齢化の傾向にあるため、情報モラル及びコミュニケーション能力の育成について、機会あるごとに小・中学校の連携を図って情報交換を行いながら、デジタルネイティブ世代の現状を踏まえた段階的指導を計画的に推進していきたい。また、学校・保護者・地域を主体とした情報交換に努め、所有及び使用に関する保護者の責任について、学校の指導方針を明確に示しておくことも必要と考える。

第5章 研究の成果と今後の課題

本研究は、平成27年度から2年間にわたり「児童生徒の豊かな人間関係づくりに関する研究－SNSの利用による友人関係への影響に着目して－」を研究主題として調査研究を進めてきた。ここでは、その成果と課題を述べる。

1 研究の成果

- 教師に対しての調査から、教師が学校生活から捉えている児童生徒の姿（見方・捉え方）と、人間関係づくりの取組の現状と課題を把握できた。
- 県内の公立小・中・高等学校の児童生徒への調査から、SNSの利用による友人関係への影響を学校適応感、友人関係との関連性から多面的に分析・考察し、傾向と特徴を示すことができた。
- 児童生徒のSNSの利用について五つの観点から可視化して把握できる「SNSチェックシート」を開発した。また、「SNSチェックシート」は、「学校楽しいーと」と組み合わせて実施することにより、児童生徒のより適切なアセスメント（見立て）や学校不適応の早期発見や早期対応に生かすことができる有効性を示すことができた。
- SNS利用の影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の年間計画は、検証改善サイクル（R-PDCAサイクル）を基準に作成することで、組織的・計画的に指導・支援する体制の充実を図ることができ、その具体的な学級活動・個別対応の取組例を提示することができた。

2 今後の課題

- 小・中・高等学校、特別支援学校の各校種の「SNSチェックシート」のデータをより多く収集・蓄積し、本県の特徴や傾向について更に明らかにすることが必要である。
- 児童生徒の健全な成長と人格のよりよい発達を促す開発的・予防的な生徒指導の視点から、学校適応とSNS利用の影響の関連性について、今後、更なる研究が必要である。

おわりに

現在、SNSを利用する児童生徒は年々増加傾向にあり、「ネットいじめ」などの友人関係におけるネット上のトラブルは、生徒指導上の課題の一つとして問題視されている。このような現状を踏まえて当課は、教師と児童生徒を対象にした実態調査を実施し、学校における「関係づくり」の取組の状況や、SNSを「利用する児童生徒」、「利用しない児童生徒」の傾向や特徴を明らかにし、「豊かな人間関係づくり」のために求められる組織的・計画的な指導・支援の在り方について研究を進めてきた。

SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係」の研究成果が、開発的・予防的・問題解決的生徒指導の基礎資料となり、児童生徒の指導や支援の発展に寄与できれば幸いである。

最後に、本研究を進めるに当たって、実態調査に御協力いただいた多くの学校、実践事例を提供していただいた研究協力員の先生方、また、研究全般について御助言をいただいた鹿児島大学教育学部心理学科教授の大坪治彦先生に改めて心から感謝申し上げたい。

【引用・参考文献】

- 文部科学省 『生徒指導提要』 平成22年
- 国立教育政策研究所 『いじめのない学校づくり 2 サイクルで進める生徒指導：点検と見直し』 Leaves. 2 平成26年
- 栃木県教育委員会 『望ましい人間関係を構築する能力を育成するための指導・援助の在り方』 平成18年